新編

中等國語讀本

新制版

卷十

4a
810
BB12

41480

教科書文庫

4
810
41-1938
20000
67983

資料室

昭和十三年一月十七日
文部省檢定濟
中學校國語漢文科用
實業學校國語科用

新編中等國語讀本

広島大学
教
67983
図書

編者
金子元臣

新制版

4a
810
昭12

卷十目次

一　御即位禮勅語……（官　報）……一
二　國家と社會的意識……西田幾多郎……四
三　いせの物がたり……（伊勢物語）……一〇
　一、東下り……一〇
　二、小野の御室……一三
　三、さらぬ別れ……一七
四　偉人と英雄……土田杏村……一八
五　羽　衣……（觀世流謠曲）……二五
六　歌謠に就いて……田邊尙雄……三一

七　美術と日本國民性 その一……藤懸靜也……三六
八　美術と日本國民性 その二……四一
九　うたひ物……四八
一、神樂歌……（神樂歌）……四八
二、催馬樂……（催馬樂）……四八
三、朗詠……（和漢朗詠集）……四九
一〇　物のあはれ……本間久雄……五三
一一　須磨……（源氏物語）……六〇
一二　紫のゆかり……（更科日記）……六六
一三　清文私評……金子元臣……七〇
一、春は曙……七〇

二、あてなるもの……七五
三、香爐峯の雪……七七
一四　神武天皇の御東征……（古事記）……八〇
一五　御民われ（和歌）……八六
一六　萬葉歌人……賀茂眞淵……九一
一七　斷光錄……綱島梁川……九三
一、苦痛の祕義……九三
二、自大自矜の一念を愼めよ……九五
三、自然……九六
一八　三餘の窓……（十訓抄）……九八
一、多言など誡むべきこと……九八

二、才能を庶幾すべきこと……九九
一九　祭のことば……村田春海……一〇一
二〇　俳文二篇……一〇五
一、十八樓の記……松尾芭蕉……一〇五
二、武陽官邸の記……横井也有……一〇六
二一　儒教の本質……小柳司氣太……一〇九
二二　學生への忠言……阿部次郎……一一五
二三　我等の使命……（國體の本義）……一二三
附錄　近世文學一覽
現代文學一覽

（筆能隆原藤傳）卷繪語物氏源

新編 中等國語讀本（新制版） 卷十

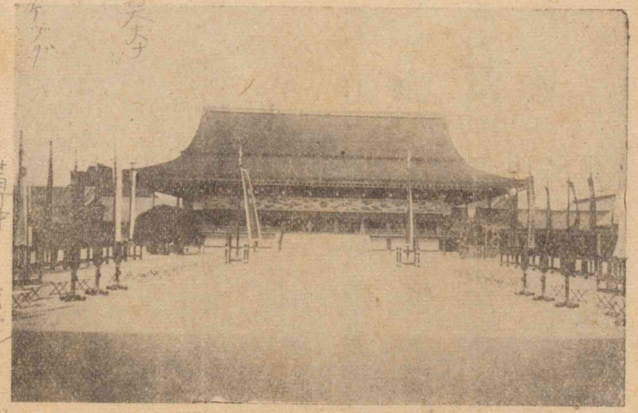
一　御卽位禮勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗惟神ノ大道ニ遵ヒ天業ヲ經綸シ萬世不易ノ丕基ヲ肇メ一系無窮ノ永祚ヲ傳ヘ以テ朕カ躬ニ逮ヘリ朕祖宗ノ威靈ニ賴リ敬ミテ大統ヲ承ケ恭シク神器ヲ奉シ玆ニ卽位ノ禮ヲ行ヒ昭ニ爾有衆ニ誥ク

皇祖皇宗國ヲ建テ民ニ臨ムヤ國ヲ以テ家ト爲シ民ヲ

視ルコト子ノ如シ列聖相承ケテ仁恕ノ化下ニ洽ク兆民相率キテ敬忠ノ俗上ニ奉シ上下感孚シ君民體ヲ一ニス是レ我カ國體ノ精華ニシテ當ニ天地ト竝ヒ存スヘキ所ナリ

皇祖考古今ニ鑒ミテ維新ノ鴻圖ヲ闢キ中外ニ徵シテ立憲ノ遠猷ヲ敷キ文ヲ經トシ武ヲ緯トシ以テ曠世ノ大業ヲ建ツ皇考先朝ノ宏謨ヲ紹繼シ中興ノ丕績ヲ恢弘シ以テ皇風ヲ宇内ニ宣フ朕寡



紫宸殿

薄ヲ以テ忝ク遺緒ヲ嗣キ祖宗ノ擁護ト億兆ノ翼戴トニ賴リ以テ天職ヲ治メ墜スコト無ク愆ツコト無カラムコトヲ庶幾フ

朕内ハ則チ教化ヲ醇厚ニシ愈民心ノ和會ヲ致シ益國運ノ隆昌ヲ進メムコトヲ念ヒ外ハ則チ國交ヲ親善ニシ永ク世界ノ平和ヲ保チ普ク人類ノ福祉ヲ益サムコトヲ冀フ爾有衆其レ心ヲ協ヘ力ヲ戮セ私ヲ忘レ公ニ奉シ以テ朕カ志ヲ弼成シ朕ヲシテ祖宗作述ノ遺烈ヲ揚ケ以テ祖宗神靈ノ降鑒ニ對フルコトヲ得シメヨ

（官報）

二　國家と社會的意識

我我は我我の子孫と共に、同一細胞の分裂に由りて生じた者である。生物は全種屬を通じて、同一の生物と見ることが出來る。生物學者は今日「生物は死せず」といつて居る。意識生活に就いて見てもその通りである。人間が共同生活を營む處には、必ず各人の意識を統一する社會的意識といふものがある。言語、風俗、習慣、制度、法律、宗教、文學等はすべてこの社會的意識の現象である。我我の箇人的意識はこの中に發生し、この中に養成されたもので、この大いなる意識を構成する一細胞に過ぎない。知識も、道德も、趣味もすべて社會的意義をもつて居る。最も普遍的なるべき學問すらも、社會的因襲を脱し得ない。今日各國に學風といふものがあるのはこれが爲である。

されば、所謂箇人の特性といふものも、この社會的意識といふ基礎の上に現れて來る多樣なる變化に過ぎない。いかに奇拔なる天才でも、この社會的意識の範圍を脱することは出來ぬ。却つてそれらの天才は社會的意識の深大なる意義を發揮した人人である。眞に社會的意識と何等の關係なきものといへば、狂人の意識の如きものに過ぎぬ。

右の如き事實は誰も拒むことは出來ぬが、さてこの共同的意識といふものが、箇人的意識と同一の意味に於いて存在するとして、一つの人格と見ることが出來るか否かについては、種種の異論のあるところである。ヘッフディングなどは、統一的意識の實在を否定し、

「森は木の集合で、これを分てば森といふものがない。社會も箇人の集合で、箇人の外に社會といふ獨立なる存在はない。」

ヘッフディング
丁抹の哲學者。
（西暦一八四三年
―一九三一年）

といつて居る。しかし分析した上で統一が實在せぬから統一がないとはいはれぬ。箇人の意識でも、これを分析すれば別に統一的自己といふものは見出されないが、然し統一の上に一の特色があつて、種種の現象はこの統一に由つて成立するものと見做されねばならぬから、一つの生きた實在と見做されるのである。社會的意識も同一の理由に由つて一つの生きた實在と見ることが出來る。社會的意識にも、箇人的意識と同じやうに、中心もあり、連絡もあり、立派に一の體系がある。ただ箇人的意識には肉體といふ一つの基礎があつて、これが社會的意識と異なる點であるが、腦といふものも決して單純な物體ではなく、細胞の集合であるから、社會が箇人といふ細胞に由つて成つて居るのと違ふ所はない。

かく社會的意識といふものがあつて、我我の箇人的意識はその一部であるから、我我の要求の大部分はすべて社會的である。若し

我我の慾望の中から、その他愛的要素を去つたならば、殆ど何物も殘らない位である。我我の生命慾も、主なる原因は他愛にあるを以て見ても明かである。我我は自己の滿足よりも、反つて自己の愛する者、又は自己の屬する社會の滿足に由つて滿足されるのである。元來我我の自己の中心は箇體の中に限られたものではない。母の自己は子の中にあり、忠臣の自己は君主の中にある。自分の人格が偉大となるに從つて、自己の要求はいよいよ社會的となつて來るのである。

今少しく社會的意識の階級に就いて述べて見よう。我我の社會的意識には種種の階級がある。その中最少であつて直接なものは家族である。家族とは我我の人格が社會に發展する最初の階級といはねばならぬ。男女相合して一家族を成すのは、單に子孫を遺すといふよりも、一層深遠なる精神的目的をもつて居るのである。人

類といふ典型より見たならば、箇人的男女は完全なる人ではない。男女を合したものが完全なる一人である。男子の性格が人類の完全なる典型でないやうに、女子の性格もまた完全なる典型ではない。男女の兩性が相補うてこそ完全なる人格の發展が見られるのである。

然し我我の社會的意識の發達は、家族といふやうな小團體の中にのみ限られるものではない。我我の精神的、並に物質的生活は、すべてそれぞれの社會的團結に於いて發達することが出來るのである。家族に次いで我我の意識活動の全體を統一して、一人格の發現とも見做さるべきものは國家である。國家の目的に就いては種種の說がある。或人は國家の本體を主權の威力に置き、その目的は單に、外は敵を防ぎ、內は國民相互の間の生命財產を保護するにあると考へて居る。又或人は國家の本體を箇人の上に置き、その目的は單に箇人の人格發展の調和にあると考へて居る。然し國家の眞正なる目的は、第一の論者のいふやうな、物質的で又消極的なものではなく、又第二の論者のいふやうに、箇人の人格が國家の基礎でもない。

我我の箇人は、反つて一社會の細胞として發達して來たものである。國家の本體は我我の精神の根柢であり、共同的意識の發現である。我我は國家に於いて人格の大いなる發展を遂げることが出來るのである。國家は統一した一の人格であつて、國家の制度、法律は我我の共同意識の意志の發現である。我我が國家の爲に盡すのは偉大なる人格の發展完成の爲である。隨つて、國家は統一した共同的意識の最も偉大なる發現であるといふべきである。

（西田幾多郎―善の研究）

西田幾多郎　哲學者。文學博士。京都帝國大學名譽教授。帝國學士院會員。石川縣の人。東京帝國大學哲學科選科出身。明治三年七月生まる。

八橋　愛知縣碧海郡。今知立町の東に遺蹟あり。

三　いせの物がたり

一、東下り

昔男ありけり。その男身をやうなきものに思ひなして、京にはあらじ、東の方に住むべき國求めむとてゆきけり。

もとより友とする人一人二人して諸共にゆきけり。道知れる人もなくて惑ひゆきけり。三河の國八橋といふ所に到りぬ。そこを八橋といふことは、水の蛛手に流れ別れて木八つ渡せるによりてなむ八橋とはいへる。その澤のほとりの木の蔭におり居て、乾飯くひけり。その澤に杜若いとおもしろく咲きたり。それを見て、或人のいはく、「かきつばたといふ五文字を、句の上に据ゑて旅の心を詠め」といひければ、

から衣きつつなれにしつましあれば

宇津の山　今宇津谷峠といふ。靜岡縣安倍郡と志太郡との界。

はるばるきぬるたびをしぞ思ふ

と詠めりければ、皆人乾飯の上に涙落して、ほとびにけり。

往き往きて駿河の國に到りぬ。宇津の山に到りて、我が入らむとする道はいと暗う細きに、蔦かづらは茂りて物心細く、すずろなる目を見ることと思ふに、修行者逢ひたり。かかる道にはいかでかおはする」といふに、見れば見し人なりけり。京にその人の許にとてふみ書きてつく。

駿河なるうつの山邊のうつつにも

ゆめにも人の逢はぬなりけり

業平の東下り（下條桂谷筆）

比叡の山　京都の東北にあり。京都府と滋賀縣との境に跨る。

鹽尻

富士の山を見れば、さ月のつごもりに雪いと白う降れり。

時知らぬ山はふじの嶺いつとてか

鹿の子まだらに雪のふるらむ

その山は、ここに譬へば、比叡の山をはたちばかり重ねあげたらむ程して、なりは鹽尻のやうになむありける。

業平修行者に會ふ（抱一筆）

なほゆきゆきて武藏の國と下つ總の國との中に、いと大きなる川あり。それをすみ田川といふ。その川のほとりに群れゐて思ひやれば、限なく遠くも來にけるかなとわびあへるに、渡守「はや船に乘れ。日も暮れぬ」といふに、乘りて渡らむとするに、皆人物わびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも、白き鳥の嘴と足とあかき、鷗の大きさなる、水の上に遊びつつ魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば、皆人見知らず。渡守に問ひければ、「これなむ都鳥」といふを聞きて、

名にしおはばいざ言とはむ都鳥

わが思ふ人はありやなしやと

と詠めりければ、船こぞりて泣きにけり。

二、小野の御室

昔惟喬親王と申す皇子おはしましけり。山崎のあなたに水無瀨といふ處に宮ありけり。年毎の櫻の花盛にはその宮になむおはしましける。その時右馬頭なりける人を常にゐておはしましけり。時世へて久しくなりにければ、その人の名忘れにけり。狩はねもごろにもせで、酒をのみつつ大和歌にかかれりけり。今狩する交野の渚

惟喬親王　文德天皇の第一皇子。小野宮と稱す。（一五三二年―一五五七年）

水無瀨　今の大阪府三島郡島本村。

右馬頭　在原業平。

交野の渚の院　大阪府北河内郡枚方町にあり。

の院、その院の櫻殊におもしろし。その木の下におり居て、枝を折りて、挿頭にさして、上、中、下、みな歌詠みけり。右馬頭なりける人の詠める、

世の中にたえて櫻のなかりせば
　春のこころはのどけからまし

となむ詠みたりける。又ある人の歌、

散ればこそいとど櫻はめでたけれ
　うき世になにかひさしかるべき

とて、その木の下を立ちて歸るに、日暮になりぬ。

御供なる人、酒をもたせて野より出で來たり。この酒を飲みてむとて、よき處をもとめ行くに、天河といふ處にいたりぬ。皇子に右馬頭おほみきまゐる。皇子の宣ひける、「交野を狩りて天河のほとりにいたるを題にて、歌よみて盃させ」と宣ひければ、かの右馬頭よみて奉りける、

狩りくらし棚機津女に宿からむ
　あまの河原にわれは來にけり

皇子この歌をかへすがへす誦したまうて、かへし得したまはず。歸りて宮に入らせたまひぬ。

夜更くるまで酒のみ物がたりして、あるじの皇子醉ひて入りたまひなむとす。十一日の月もかくれなむとすれば、かの右馬頭よめる、

飽かなくにまだきも月の隱るるか
　山の端逃げて入れずもあらなむ

皇子に代り奉りて、紀有常、それがかへし、

おしなべて峯もたひらになりななむ
　山の端なくば月も入らじを

小野　京都府愛宕郡大原村。

かくしつつまうで仕うまつりけるを、思の外に御髪おろさせ給ひて、小野といふ處に住み給ひけり。正月に拜み奉らむとてまうでたるに、比叡の山の麓なれば雪いと高し。強ひて御室にまうでて拜み奉るに、つれづれといと物悲しくておはしましければ、やや久しく侍ひて、いにしへの事など思ひいでて聞えけり。さても侍ひてしがなと思へど、おほやけ事どもありければ、え侍はで、夕暮にかへるとて、

在原業平（不退院藏）

忘れては夢かとぞおもふ思ひきや
　雪ふみわけて君を見むとは

ととなむ泣く泣く來にける。

母なむ云云　業平の母伊登内親王。桓武天皇の皇女にして阿保親王の妃。

長岡　京都府乙訓郡向日町。

三、さらぬ別れ

昔男ありけり。身はいやしけれど、母なむ親王なりける。その母長岡といふ所に住み給ひけり。子は京に宮仕しければ、まうづとしけれど、しばしばえまうでず。一人子にさへありければ、いとかなしうし給ひけり。

さるほどに、師走ばかりにとみの事とて御文あり。驚きて見れば、こと言はなくて、

老いぬればさらぬ別れのありといへば
　いよいよ見まくほしき君かな

となむありける。これを見て馬にも乘りあへず參るとて、いといたう打ち泣きて、道すがら思ひける。

世の中にさらぬ別れのなくもがな
　千代もといのる人の子のため

（伊勢物語）

四　偉人と英雄

偉人といふ時に、我我がすぐに聯想するのは英雄や天才であるが、英雄と天才と偉人との相違は何處にあるだらうか。私はまづ英雄の性格を分析していつて、それと相違する偉人の性格を明かにしてみたい。

土田杏村

英雄と天才との間の區別も明瞭でない。

天才は人間活動のあらゆる部面に現れる。宗教的の天才と、學問的の天才と、あらゆる種類の天才とが現れるけれども、英雄は專ら人間社會の政治的部面に現れる。人間の社會生活は思想的經濟的などいろいろの部面を含むにしても、最後の統一形式として政治があり、その政治形式によつて社會生活は全體的な纏まりを得るのである。英雄は專らこの政治的部面に現れて來る點で、天才とは相違する道を歩むものとなる。

英雄の性格は第一には強い自信である。繼續せる意志があつて深く自らを信じてゐる。英雄と普通人との質的の相違は、たとひ大したものではない場合にも、普通人は英雄のやうに強い自信を持つことが出來ない。普通人が懷疑し挫折し失望するところを、英雄は飽くまでも斷行し再起し、希望を大きくする。

成功すれば自分の力量が實驗されたものとして、その自信を一層鞏固にするし、失敗すれば一つの試煉が與へられたものとして、その抵抗力を一層錬磨するであらう。英雄には自棄や失望がない。若し自棄や失望が起つたとすれば、その時は英雄が最後の睹に失敗して、その運命を壞し、地に仆れた時であるだらう。人生の悲劇と

してこれ程悲慘なものはない。

英雄の性格の第二は強い直覺力である。論理的に整然と綜合して行くといふではなくて、現象から來る感覺的な印象の上に、直ちに綜合的の見通しを加へ、その現象の全體的に動いて行く方向を洞察するのである。

英雄の性格の第三は強い示唆力である。大衆の上に特異の暗示を與へ、その暗示の下に大衆を或方向へ動かして行くことに、英雄は特殊の天分を持つてゐる。かやうにして英雄は結局大衆を社會を政治的に支配する。

英雄の性格の第四としては、その強い支配力を擧げなければならない。人間が人間を支配することは人間の最も原始的な本能であるが、この支配は政治的形式に於いて最も完全な形態を示す。英雄は元來その本能的な支配欲を誰よりも強くもつ人間であるから、この支配欲を働かす爲に、みづから社會の政治的部面に現れて來るといつてもよいであらう。

英雄の性格が以上のやうに解剖されると、偉人の性格はこれに對照しておのづから明かにされて來る。英雄は人間的なエネルギーに於いて確かに普通人を超えたものであるが、同時にそれは人間として厭ふべき要素をも多分に含んでゐる。我我は人間的なエネルギーを正しく表現するために、英雄のこの厭ふべき要素から離れなければならない。かやうにして英雄を修正したものが、まことの偉人なのである。

英雄は人間社會の政治的部面に現れるが、偉人は政治だけでなくすべての部面に現れる。宗教的偉人、學問的偉人など、我我はあらゆる部面に偉人を見ることが出來よう。しかし偉人は天才が唯それぞれの部面で卓越したエネルギーを表現してゐるといふのと

エネルギー　物體が仕事をなし得る能力。元氣。精力。

は違つて、一つの部面に卽しつつなほ、人類的社會的に全體的であり綜合的でなければならない。言ひ換へれば、人間の社會を全面的に率ゐるものでなければならない。天才は人間の一つの行動の中に現れるが、偉人は人類として社會としての進みの道に現れる。隨つて偉人は必しも政治的に人間を率ゐはしないが、政治的に率ゐたと同じ實績を擧げつつ人間を率ゐて行くのである。

偉人は時代に對して深い直覺力を持つてゐる。しかしその直覺力は論理的な綜合となつて現れる場合もあらう。いかに細密に論理を築いていつたにしても、論理は部分的の分析に向ふものであるから、最後の綜合は直覺的に行はれなければならない。偉人はその綜合力を持つのである。

偉人は自らなる感化力影響力を持たなければならない。英雄は大衆の中に宗教的な信頼を博し、大衆を示唆することに特殊の力を持つてゐるが、偉人は特に大衆を示唆しようとしない。或は大衆を示唆する技術を弄しようとしない。しかしその行動はおのづから大衆に信頼せられ、大衆の動きの目標になるのである。偉人はその點で、人類の模範、社會の標識であるといつてもよい。

偉人は支配欲によつて動くものではないが、その行動は人間を社會を率ゐるものとなる。最後に偉人は英雄に見たと同じやうな強い自信を持つであらう。自信は結局人間的自覺の究極點だからである。しかし偉人の自信は、英雄に見るやうに狂信的なものでなく、十分の自己批判を含むのが常となつてゐる。

自信の鍛錬は事實反省なしに行はれるものではない。反省によつて鍛錬された自信なればこそ、人類のあらゆる惱を含んで人間的であり、總べての人に人類的模範としての信頼を博し得るのである。

我我は必しも英雄を要求しないが、偉人は出現してほしい。人間はそれぞれ違つた箇性を持つだけでなく、その中に質と量とに於いて、言ひ換へれば人間的エネルギーに於いて、普通人よりも遙かに卓越したものも生まれる筈であるから、偉人は必ず出現し得るのである。唯そのエネルギーは英雄的でなく、偉人的に發揮されなければならない。あらゆる方面に於いて行き詰つた現代の社會は、切に偉人の出現を仰望してゐる。（土田杏村―紫野雜記）

幾多の偉人は各、その特有の偉大を挾んで我等を壓し來れども、俯して我が弱小を悲しまむよりは、仰いで他の高大を包容せよ。彼等が如何なる高大を擁して我を壓し來るとも、我は猶彼等を容るることを得るなり。人性ここに涙なきにあらずといへども、かくの如くして他の偉大はやがて我等が偉大となるなり。嗚呼何等廓然たる大公の心ぞ。（綱島梁川）

土田杏村　名は茂。哲學者、評論家。新潟縣の人。昭和九年歿す。（一八九四年―一九五五年）

五　羽　衣

シテ　天人
ワキ　白龍
ワキツレ　漁夫

風早の云云　萬葉集に「風早の三保の浦曲を漕ぐ舟の舟人さわぐ浪立つらしも」。ここの三保の浦は靜岡縣安倍郡。

萬里の好山に云云　詩人玉屑に「千里好山雲乍起、一樓明月雨初晴」。

風向ふ云云　冷泉爲相の歌に「風向ふ雲の浮浪立つと見て釣せぬ先に歸る舟人」。

ワキ一聲「風早の三保の浦曲を漕ぐ船の、浦人さわぐ浪路かな。

ワキサシ謠「これは三保の松原に白龍と申す漁夫にて候ふ。ワキツレ謠「萬里の好山に雲乍ち起り、一樓の明月に雨初めて晴れたり。げにのどかなる時しもや、春のけしき松原の、浪立ちつづく朝霞、月ものこりの天の原、及びなき身の眺にも、心空なるけしきかな。歌「忘れめや、山路をわけてきよみ潟、遙かに三保の松原に、たちつれいざや通はん。風向ふ雲のうき浪たつと見て、釣せで人や歸るらん。待てしばし、春ならば、吹くものどけき朝風の、松は常磐の聲ぞかし。浪は音なき朝なぎに、釣人おほき小舟かな。ワキ詞「われ三保の松原にあがり、浦のけしきをながむる所に、虛空に花ふり、音樂きこえ、靈香（れいきやう）よもに薫ず。これただごとと思はぬ所に、これなる松に、美しき衣かかれり。よりて

見れば、色香妙にして常の衣にあらず。いかさま取りて歸り、古き人にも見せ、家の寶となさばやと存じ候ふ。

シテ詞「なう、その衣はこなたのにて候ふ。何しに召され候ふぞ。ワキ詞「これは拾ひたる衣にて候ふ程に、取りて歸り候ふよ。シテ詞「それは天人の羽衣とて、たやすく人間に與ふべき物にあらず。元の如くにおき給へ。ワキ詞「そもこの衣の御主とは、さては天人にてましますかやさもあらば、末世の奇特にとどめおき、國の寶となすべきなり。衣を返すことあるまじ。シテ詞「悲しやな、羽衣なくては飛行のみちも絶え、天上に還らんことも叶ふまじ。さりとては返したび給へ。ワキ詞「この御詞を聞くよりも、いよいよ

天女（木村武山筆）

天人の五衰　天衆が命終の時五つの死滅の異相を生ずるをいふ。その中に「頭上華萎」の相あり。

天の原の歌　後風土記に出づ。

迦陵頻伽　梵語。妙音鳥と譯す。

白龍力を得、謠「もとよりこの身は心なき、天の羽衣取り隱し、謠「叶ふまじとて立ちのけば、シテ謠「今はさながら天人も、羽なき鳥の如くにて、あがらんとすれば衣なし。ワキ詞「地にまた住めば下界なり。シテ謠「とやあらん、かくやあらんとかなしめど、ワキ謠「白龍衣を返さねば、シテ謠「力およばず、ワキ謠「せんかたも、地謠「涙の露の玉鬘、かざしの花もしをしをと、天人の五衰も、目の前に見えてあさましや。

シテ謠「天の原、ふりさけ見れば霞立つ、雲路まどひてゆくへ知らずも。地謠「すみ馴れし、空にいつしかゆく雲の、うらやましきけしきかな。迦陵頻伽のなれなれし聲、今さらにわづかなる、雁がねの歸りゆく、天路を聞けばなつかしや。千鳥鷗の沖つ浪、行くか歸るか春風の、空に吹くまでなつかしや。

ワキ詞「いかに申し候ふ。御姿を見たてまつれば、あまりに御痛はしく候ふほどに、衣を返し申さうずるにて候ふ。シテ詞「あらうれしや。こ

なたへ賜はり候へ。ワキ詞「しばらく、承り及びたる天人の舞樂、ただ今ここにて奏し給はば、衣を返し申すべし。シテ謠「うれしや。さては天上に還らんことを得たり。このよろこびに、とてもさらば、人間の御遊のかたみの舞、月宮をめぐらす舞曲あり。ただ今ここにて奏しつつ、世のうき人に傳ふべし。さりながら、衣なくては叶ふまじ。さりとてはまづ返し給へ。ワキ詞「いや、この衣を返しなば、舞曲をなさでその儘に、天にやあがり給ふべき。シテ詞「いや疑は人間にあり。天に僞なきものを。ワキ謠「あらはづかしや。さらばとて、羽衣を返し與ふれば、シテ謠「少女は衣を著しつつ、霓裳羽衣の曲をなし、ワキ謠「天の羽衣風に和し、シテ謠「雨にうるほふ花の袖、ワキ詞「一曲をかなで、シテ謠「舞ふとかや。地謠「東遊の駿河舞、この時や始なるらん。

クリ地謠「それ久かたのあめといつぱ、二神出世のいにしへ、十方世界をさだめしに、空はかぎりも無ければとて、久方の空とは名づけた

二神　伊弉諾、伊弉冉の二尊。

十方　東西南北乾坤巽艮上下。

り。シテサシ謠「然るに、月宮殿のありさま、玉斧の修理とこしなへにして、地謠「白衣黑衣の天人の數を、三五にわかつて、一月夜夜のあま少女、奉仕を定め役をなす。シテ謠「我も數ある天少女、地謠「月のかつらの身をわけて、かりに東の駿河舞、世につたへたる曲とかや。クセ「春霞たなびきにけり久かたの、月のかつらも花や咲くぴに花かづら色めくは、春のしるしかや。おもしろや天ならで、ここも妙なり天津風、雲のかよひ路吹きとぢよ。少女の姿しばしとどまりて、この松原の春の色を、三保がさき、月清みがた富士の雪、いづれや春の曙、たぐひ浪も、松風も、のどかなる浦のありさま。その上天地は何を隔てん玉垣の、内外

春霞云云　後撰集、紀貫之、「春霞たなびきにけり久方の月の桂も花や咲くらむ」。

天津風　古今集、僧正遍昭、「天つ風雲のかよひ路吹きとぢよ少女の姿しばしとどめむ」。

三保の松原

君が代は云云　拾遺集、讀人不知、「君が代は天の羽衣まれに著て撫づともつきぬ巖なるらむ」。
蘇命路の山　須彌山ともいふ。佛經に出づ。
浮島がはら　靜岡縣駿東郡。
大勢至　菩薩の名。智慧を司る。
東遊　舞曲の名。
あしたか山　靜岡縣駿東郡愛鷹山。

の神の御するゑにて、月も曇らぬ日の本や。シテ謠「君が代は、天の羽衣まれに著て、地謠「撫づとも盡きぬ巖ぞと、聞くも妙なり東歌。聲そへてかずかずの、笙、笛、琴、箜篌、孤雲の外に充ち滿ちて、落日の紅は、蘇命路の山をうつして、綠は浪に浮島がはらふ嵐に花ふりて、げに雪をめぐらす白雲の袖ぞ妙なる。シテ謠「南無歸命月天子、本地大勢至。地謠「東遊の舞の曲、シテ謠「あるひは天つみ空の綠の衣、地「又は春立つ霞の衣、シテ「色香も妙なり少女の裳裾、地謠「左右左、さいう颯颯の、花をかざしの天の羽袖、靡くもかへすも舞の袖。キリ地謠「東遊のかずかずに、その名も月の宮人は、三五夜中の空に又、滿願眞如の影となり、御願圓滿、國土成就、七寶充滿の寶をふらし、國土にこれを施し給ふ。さる程に時移つて、天の羽衣浦風に、たなびきたなびく三保の松原、浮島が雲の、あしたか山や富士の高嶺、かすかになりて、天つみ空の霞に紛れて失せにけり。（觀世流謠曲）

六　歌謠に就いて

我が國上古の音樂には、宗教の音樂として神樂があり、軍樂として久米歌、吉志舞等があり、卽興的に歌ふものとして歌謠があつたが、いづれも皆聲樂ばかりで、器樂といふものは一つもなかつた。實に日本民族は、その原始狀態に於いて聲樂的民族であつた。後になつて、支那から進步發達した形式的器樂が輸入されて、大いに器樂の用法にも熟練したけれども、それにも係はらず、支那のやうに純器樂として發達することを得ないで、何時の間にか、又聲樂化してしまつた。奈良朝や平安朝の初期には、支那の雅樂が純器樂として日本に入り、我が邦の上流社會を風靡した程の勢であつたが、平安朝の中期から、これが多少日本化して來ると、催馬樂や、朗詠や、今樣のやうに、聲樂となつてしまつたのである。鎌倉時代から以後、室町、

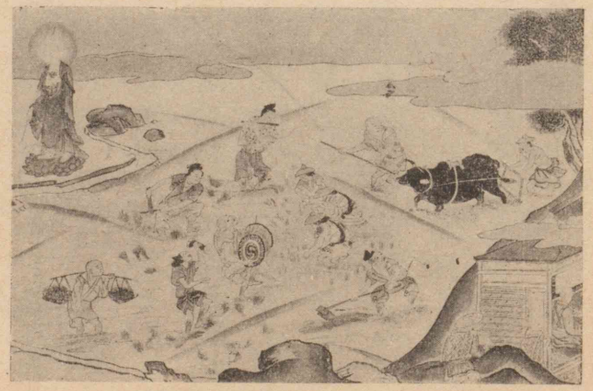
江戸の時代に發達したもの、例へば、謠曲、宴曲、小唄等も、悉く聲樂であることはよく人の知る所である。

神樂

神樂は今も尙神事に行はれて居るが、今の所謂神樂といふものには二種類ある。一は宮中賢所、伊勢神宮その他の大社で行はれる極めて嚴肅なものであつて、音樂を主としてゐる。これに反して他の一は、鎭守の社等で行はれて、俗に「里神樂」又は「お神樂」と呼ばれる舞踊を主としたものであつて、多くは滑稽なものである。

宮中賢所や伊勢神宮などで行はれる正神樂を聽くと、實に神聖な、嚴肅な、形式的なものであつて、頗る進步した儀式を備へて居るが、かやうな形式的なものが、原始的な古代から存在して居ようとは考へられない。歷史を按じて見ても、これは平安朝中期の新作である。また里神樂の方も、その平民的なこと、舞踊的なこと、內容本位なこと、滑稽的なことに於いて、原始的な所はあるけれども、今日行はれてゐる里神樂は、その技巧に於いて、また劇的仕組に於いて、決して原始的のものとは思はれない。殊に現時の里神樂に就いて感ずることは、そのやり方が頗る支那元代の劇に似通つてゐることである。

一體支那元代の雜劇は、日本へ入つて鎌倉時代の田樂や猿樂の一部の起原をなして居るものであるが、今日の里神樂は、恐らくこれ等の田樂などの影響を受けて發達



田樂（伯耆大山寺緣起）

して來たものであらう。予は種種の方面の研究からして、日本上古の原始的神樂の眞相を推測して見るのに、少しも劇的な仕組などはなくて、頗る平民的な、舞踊本位な、滑稽的なものであつたに相違ないと思ふ。

戰陣に用ゐた歌舞、卽ち軍樂にも、古くから種種あるが、その中最も名高いのは久米歌と吉志舞とである。前者は神武天皇が大和東征の時に、三軍を鼓舞するためにお作りになつたもので、頗る勇壯な舞が附いてゐる。その舞を久米舞といふ。後者は神功皇后が三韓征伐の御凱旋に際して出來た舞曲である。久米舞の方は、今もなほ毎年紀元節に宮中で行はれる。

上古には非常に澤山の歌謠があつたことは、記紀を見ると明かである。いづれも皆、よく質實にその情緒を歌ひ出してゐる。これらは總べて卽興的に詠歎したもので、しかも音樂的諧調を具へてゐたのである。

それが中世になつて、形式的に發達するに從つて、二途に分れて來た。その一は、どこまでも音樂として取り扱つて行かうとするものであつて、これは純然たる聲樂となつてしまつた。さうして中世の歌謠となつたのである。その二は、音樂を離れて、文學として發達して來て、五七調の長歌や三十一文字の短歌となり、人人はこれを讀み又は見て、心に樂しむといふ風になつてしまつたのである。

（田邊尙雄―日本音樂講話）

田邊尙雄
音樂評論家。東京の人。國學院大學教授。東京帝國大學物理科出身。明治十六年生まる。

祝

嘉辰令月歡無極、萬歲千秋樂未央。　謝偃
長生殿裏春秋富、不老門前日月遲。　保胤
よろづ世と三笠の山ぞよばふなる
天が下こそ樂しかるらし　仲算

（和漢朗詠集）

七　美術と日本國民性　その一

美術は一國文化の華の開いたものである。およそ一國の文化は、その國民性を背景とするに至つて、始めて光輝を發するものであつて、過去を顧みれば、一國の文化には、必ずその國民性を背景とした大きな流が明瞭に認められる。

現代に於いては、自身がその社會の渦中にあつて、種種な文化の傾向を見てゐる爲に、如何なる文化が眞にその國民性を代表するか、判定に苦しむものである。繪畫に例を取るならば、日本畫と油繪とに於いても、青年の或者は、油繪の方が現代の日本國民性に適するであらうと考へ、中年以上の或者は、日本畫こそ我が國民性によく適合すると考へるであらう。然しそれは人人の考へやうで、歐米の思想や文物に多く親しんで居る人人には油繪が好まれ、過去の

六朝　支那の西晉、東晉、宋、齊、梁、陳の六朝。

日本文化に趣味をもつ人には日本畫が好まれるのである。それ故、我我が我が藝術とその國民性との關係を考へようとするには、我が國民の趣味や、文化の傾向を知らなければならぬ。卽ち過去の時代に溯つて、その時時の文化の變遷を見、藝術の變化の迹を尋ね、美術に現れた我が國民性の如何を考察しなければならぬ。

我が國の古代には、如何なる藝術があつたか、遺作が極めて乏しいので、委しい事は無論わからないが、元來我が國民は風光明媚な自然の風趣に惠まれて、藝術をよく理解し味ふ力をもつてゐたから、一度優れた大陸藝術に接すると、勃然として我が藝術の振興を促し、自己獨特の長所を發揮したのである。

我が國に遺存する最古の優秀な藝術品としては、推古時代のものを擧げねばならぬ。これ等の藝術品には、內地で作られたものもあれば、外國から傳來したものもある。然し、いづれにしても、所謂六

朝式のもので、これはいふまでもなく聖德太子の偉大な力によつて興隆されたものである。太子がその當時、出來得るかぎり、朝鮮を媒介として大陸の文明を吸收し、我が國の文化開發に盡されたことは、實に驚くばかりであつた。この時に於ける我が文化の變遷は、明治維新の時に際し、歐米文明の影響を受けて變化したよりも、更に著しく大陸文明に化せられたことであつたらう。大和の法隆寺及びその寶物を見ても、よく當時の盛觀が偲ばれるのである。

次の奈良時代に於いては、所謂天平期を最盛期とし、建築にも彫刻にも驚くべき發達が遂げられた。これは唐朝の進んだ文明が直接に我が國に輸入されたからである。推古時代の美術が一躍して奈良時代の美術になるには、その變化があまりに大き過ぎるけれども、本元の支那で、六朝式から隋の過渡期を經て唐朝式となつたので、我が國でもこの新來の文明を追うて、家屋調度の類から日常生活の樣子まで唐風に擬ふることとなり、俄かにこの飛躍を見たのであらう。隨つて當時の支那思想も亦著しく我が思想界を風靡したに相違ない。然し、かやうな風潮に乘じたのは、宮廷及び貴族の一部のみであつて、都會を一歩離るれば、國民の文化は極めて低く、無智蒙昧な有樣であつたが、ともかくもこの唐朝文化の影響によつて、我が文化の根柢は益〻堅くなつた。

樹下美人（正倉院御物）

平安時代の初期は、なほ唐の影響を受けてゐたが、その中期から、漸く日本國民としての自覺を喚び起し、次第に外國文明から離れ

て、我が國の特色ある文明を築くに至つた。その頃から國文學が起つて漢文學に對立するやうになり、藝術に於いても、支那には見ることの出來ぬ特殊な流風が起つて、更に鎌倉時代に至つてこれが完成された。されば我が日本文化の基礎は、早く古代からあつたが、推古及び奈良時代に外國の影響を受け、更に平安及び鎌倉時代に至つて、それを純日本化して、我が國獨得の精華を發揮するやうになつたといふべきである。

聖衆來迎（傳惠心僧都筆）

平安時代は宮廷及び搢紳たちの文化であつたが、鎌倉時代には、更にその範圍が廣まつて普遍的性質を帶び、國民的藝術の發達に向つて一歩を進めたのである。彫刻についていへば、天平時代はその精を極め能を罄してはゐるが、これはただ唐朝彫刻の摸倣である。然るに平安時代に定朝があらはれ、鎌倉時代に運慶、湛慶が出でて、木彫界は一大進展をなし、ここに純日本彫刻が出現した。また繪畫について考へれば、早く佛畫は精妙な域に達してゐたけれども、平安時代に國文學の發達と關聯して、純鑑賞的の繪畫が現れ、この流は平安朝の末から鎌倉初期に至つて益榮えて、遂に所謂大和繪の一體をなすに至つたのである。源氏物語繪卷、信貴山緣起、戲獸繪卷等はその代表的傑作である。

定朝　佛工の名手。京都の人。法橋に叙せらる。一條天皇の頃の人。

運慶　佛師。康慶の子。備中法印と稱す。後鳥羽天皇の頃の人。

湛慶　佛師。運慶の子。尾張法印と稱す。

源氏物語繪卷　數種あり。最優秀なりと稱せらるるは藤原隆能の畫、世尊寺伊房等の詞書と傳へらるるもの。

信貴山緣起　三卷。鳥羽僧正の筆と傳ふ。

戲獸繪卷　四卷。鳥羽僧正の遺作といふ。

八　美術と日本國民性　その二

鎌倉時代の末から室町時代へかけて、藝術界に特殊な一派を生じた。即ち當時の新派ともいふべき、支那から輸入した宋元水墨畫

如拙　畫僧。明の人。應永年中來りて京都相國寺中亂芳軒に住す。

周文　畫僧。字は等慶。近江の人。京都相國寺に住す。

雪舟　畫僧。名は等楊。備中赤濱の人。永正三年八月寂す。（二〇八〇年—二一六六年）

狩野派　日本畫の一派。支那の北宗畫より出で、剛健の筆致を用ゐ、多く漢土の山水人物を畫く。明應の頃狩野正信に起る。

曾我雲谷の諸派　曾我派は曾我周文の創めたるもの。雲谷派は僧雪舟の創めたるもの。

の一體で、禪宗趣味と關聯して我が藝術に一新機軸を開いた。この派には如拙、周文、雪舟などの大家が出て、その根柢を作り、更に狩野派が榮え、曾我、雲谷の諸派を生じて、舊來の大和繪は全く勢力を失つた。足利義滿から同義政の時代は、この流派の水墨減筆の一體の最盛期であつた。これもその趣味がよく當時の貴族たる武家の好尚に適したからである。

夏景山水（雪舟筆）

然るに、世は所謂下剋上の戰國時代となり、社會組織に一大變革を來し、尾張の一農民が關白となつて、一躍人臣の榮位を極めたのを始として、英雄豪傑は徒手空拳で一國一城の主となる時勢とな

つては、何事にも豪壯華美の風が喜ばれて、絢爛眼を奪ふやうなものや、艶麗人意を快うする儔のものでなければ滿足せられなくなつた。ここに於いて、極彩色の花鳥動物などが盛に描かれ、また當時の社會狀態を描いた新しい風俗畫などが起つたのである。されば安土、桃山時代は僅かに三十年に過ぎなかつたけれども、我が藝術史上頗る重要な時代で、これを日本の文藝復興の時期とも稱すべく、江戸時代の近世藝術の基礎は茲に築かれたのである。

狩野山樂筆

江戸三百年の間は、泰平の餘澤で文學藝術は蔚然として興り、益、

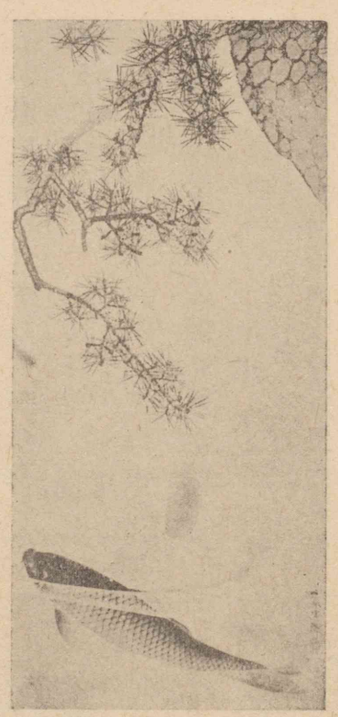
光悅　本阿彌光悅。書畫に通ず。畫は海北友松に學び、土佐風を加味して光悅風を興す。寛永十四年二月歿す。（二二一七年—二二九七年）

宗達　野野村氏。名は以悅、字は伊年、俵屋といひ、對青軒と號す。生死年代詳かならず。

光琳　尾形氏。名は方祝。狩野常信に學び、野野村宗達の風に倣ひ、又古土佐、及び本阿彌光悅を慕ふ。享保元年六月歿す。（二三二一年—二三七六年）

日本趣味の發展を遂げた。繪畫は殊に隆盛を極め、幾多の流派を生じて、藝術の花の繚亂たる春を現出した。

光悅に始まり、宗達、光琳を經て抱一に至る一派の如きは、その範を大和繪に取り、更にこれを醇化したものである。また近世初期の風俗畫の一體の如きも、等しく範を鎌倉時代の繪卷物に取つたものである。殊に江戸趣味の上に作られた浮世繪版畫の如きは、平民の藝術として大いに榮えた。圓山、四條の諸派も江戸時代に於ける特殊な畫風であつた。その他、長崎からはひつて來た西洋の畫風は、僅かながら一部の研究者に刺戟



圓山應擧筆

抱一　酒井氏。名は忠因、鷺村と號す。西本願寺に入り權大僧都に任ぜられ、後江戸に住す。文政十一年十二月歿す。（二四二一年—二四八八年）

浮世繪　當時の風俗を主として寫せる繪畫。寛永の頃岩佐又兵衞に起る。

圓山派　近世に於ける日本畫の寫生風の一派。圓山應擧に始まる。

四條派　江戸時代の繪畫の一派。松村吳春を祖とす。

西洋の畫風云云　司馬江漢、永田

を與へ、支那の南宗畫は文人墨客の間に行はれて珍とせられた。

明治に至つては、西洋藝術の影響を受けて、ここに我が固有の藝術上に一大變革を來した。元來わが國の藝術は長い歷史をもつてゐるので、一時は外來の作風に傾いても、暫くしてまた日本的趣味に復るのが常である。現代は各人の考に依つて各自の藝術を研き、舊來の日本畫も新來の油繪も共に榮えてはゐるが、然し油繪も日本に於いて描かれる以上は、日本の特色を發揮すべきで、外國のものとは、違はねばならぬ。實に現代の油繪には日本趣味に傾いたものが少くない。また日本畫も舊來のものとは違つて、西洋畫の影響をうけて、

彦根屏風（岩佐又兵衞筆）

面目を一新した。されば現代では、日本畫も油繪も共に現代文化を背景として作られてゐるもので、今の青年が油繪を愛し、中年以上のものが日本畫を賞するのも、よく現代藝術鑑賞の兩面を現してゐるのである。

要するに、日本藝術は常に大陸藝術の影響を受けて、これを日本化して進歩發達したものであつて、現代藝術もまた外國藝術を更に日本化することによつて、優秀なものともなり、特殊な藝術ともなるべきである。

かくの如く、外國の藝術を日本化することは、卽ち國民性を背景としての大きな流があるからである。日本人の祖先以來承け繼いで來た獨得の國民性は、不知不識の間にその趣味性格の上に大いなる影響を與へてゐるのである。然し藝術趣味はそれぞれ人人によつて異なるものであるから、各〻その好みに從つて藝術を鑑賞し

善吉等をさす。

南宗畫　唐の王摩詰を祖とす。江戸時代に傳來して專ら文人の間に行はれしを以て、又文人畫といふ。

創作すべきで、各種の異なつた流風を生じてこそ始めてその國の藝術は榮えるのである。しかもよく一國の藝術として誇り得るものは、外國藝術の摸倣ではなくて、その國民の文化を背景とし、國民性によつて作られた作物でなければならぬ。

一國の國民性がその文化の上に及ぼす力は偉大なものであつて、藝術もまたその國民の風尙を反映するものとすれば、假令一時は外國文化の影響を被つて、從來の樣式とは懸け離れたものの如き狀態に置かれることがあつても、年月を經るに隨ひ、何時の間にかその本然の姿に返つて、決して外國文化そのものと同一にはならぬであらう。これが、藝術がその國國に依つて大いなる相違を生ずる所以である。（藤懸靜也）

藤懸靜也　文學博士。帝室博物館學藝委員。國學院大學教授。茨城縣の人。東京帝國大學史學科出身。明治十四年二月生まる。

九　うたひ物

一、神樂歌

劍

しろがねの目貫の太刀をさげ佩きて、奈良の都をねるは誰が子ぞ。ねるは誰が子ぞ。（本）

いそのかみ、ふるや男の太刀もがな。組の緒垂でて宮路かよはむ。宮路かよはむ。（末）

二、催馬樂

葛城

かづらきの、寺の前なるや。豐浦の寺の、西なるや。（一段）　榎の葉井に、白壁しづくや、眞白壁しづくや。おしとんど。おしとんど。（二段）

しかしてば、國ぞ榮えむや。わ家らぞ富みせむや。おしとんど。おしとんど。（三段）

葛城寺　奈良縣添上郡に舊址あり。

豐浦寺　同縣高市郡にあり。今廣嚴寺といふ。

三、朗詠

早春　都良香

氣霽レテハ風新柳ノ髮ヲ梳リ、氷消エテハ浪舊苔ノ鬚ヲ洗フ。

志貴皇子

いはそそぐたるみのうへの早蕨のもえいづる春になりにけるかな

花　菅文時

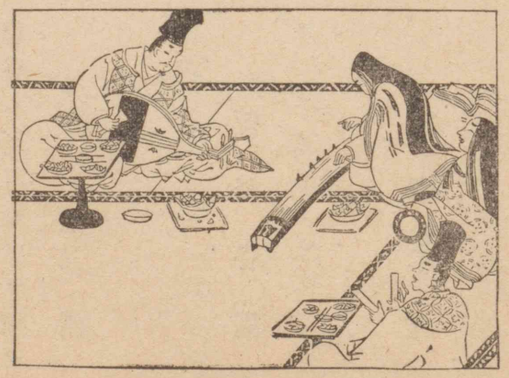
日ニ瑩カレ風ニ瑩カル、高低千顆萬顆ノ玉、枝ヲ染メ浪ヲ染ム、表裏一入再入ノ紅。

素性法師

都良香　文章博士。博覽强記、最も詩文に長じ、吟詠神に入ると稱せらる。元慶三年卒す。（一五〇四年―一五三九年）

志貴皇子　又施基皇子に作る。天智天皇の第三皇子、光仁天皇の御父。靈龜二年八月薨ず。光仁天皇の朝春日宮天皇の尊號を追贈せらる。（―一三七五年）

菅文時　文章博士、菅原道眞の孫。博學洪才當時に冠たり。天德四年九月薨ず。世に菅三品と稱す。（一五五九年―一六四一年）



貴紳管絃

見てのみや人にかたらむさくら花
　手ごとにをりて家づとにせむ

首夏　白樂天

甕頭ノ竹葉ハ春ヲ經テ熟シ、階底ノ薔薇ハ夏ニ入ツテ開ク。

源順

わが宿の垣ねや春を隔つらむ
　夏きにけりと見ゆるうの花

八月十五夜　紀長谷雄

十二廻ノ中、コノ夕ベノ好ニ勝ルハナク、千萬里ノ外、各〻ワガ家ノ光ヲ爭フ。

詠者未詳

白雲に羽うちかはしとぶ雁の
　かずさへ見ゆるあきのよの月

素性法師　僧正遍昭の子。俗名良岑玄利。出家して石上良因院に住す。

源順　和歌に巧みに文を善くす。梨壺五人の一人。永觀元年四月卒す。（一五七一年—一六四三年）

擣衣　劉元叔

北斗ノ星ノ前ニ旅雁横タハリ、南樓ノ月ノ下ニ寒衣ヲ擣ツ。

紀貫之

唐衣うつ聲きけば月きよみ
　まだ寢ぬ人を空にしるかな

雪　謝觀

曉ニ梁王ノ苑ニ入レバ雪群山ニ滿チ、夜庾公ガ樓ニ登レバ月千里ニ明カナリ。

源景明

都にてめづらしとみるはつ雪の
　よし野の山に降りにけるかな

山水　大江澄明

山復山、何レノ工カ青巖ノ形ヲ削リ成セル、水復水、誰ガ家カ

劉元叔　唐の人。名は敞和。一に字平叔。高苑縣の令たりき。

紀貫之　歌仙の稱あり。又文に巧みに書を善くす。古今集撰者の一人。御書所預、土佐守、木工權頭等に歴任す。天慶九年卒す。（一一六〇六年）

謝觀　傳詳かならず。

源景明　兼光の子。傳詳かならず。

大江澄明　朝綱の子。官民部少輔に至る。

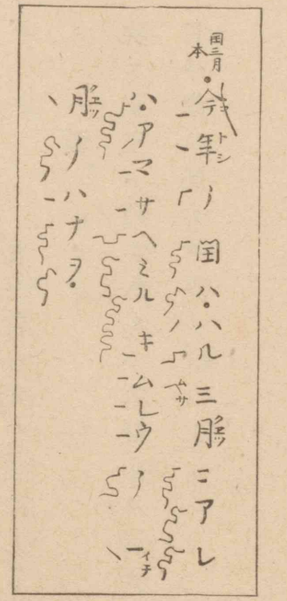
高向草春　醍醐天皇頃の人。傳詳かならず。

みむろ　三室山。又神南備山といふ。奈良縣生駒郡龍田村。

碧潭ノ色ヲ染メ出ダセル。

高向草春

神なびのみむろの峯やくづるらむ
たつ田の川の水のにごれる



朗詠譜

將軍　源順

雄劍腰ニ在リ、拔クトキハ則チ秋霜三尺、雌黃口ヨリス、吟ズレバ亦寒玉一聲。

一〇　物のあはれ

「物のあはれ」といふ言葉は、わが國では昔からいひ舊された言葉ではあるが、この言葉には、文學の人生にもたらす效果、竝に吾吾の文學に對する態度といふことについての重大な意味が含まれてゐる。だから、この言葉の意味を詳しく考へ直すといふことも、あながち無用のわざではあるまい。

「物のあはれ」といふ言葉は、用ゐられる場合によつても、用ゐる人によつても異なつてゐるが、「物のあはれ」の文學的意義について、最も透徹した意見を示したのは本居宣長である。彼はその源氏物語玉の小櫛の中に、このことを論じてゐるが、まづ「あはれ」といふ言葉の意義から始めて、次のやうにいつてゐる。

「あはれ」といふは、もと見るもの、聞くもの、觸るるごとに心に感

じて出づる歎息の聲にて、今の世の言葉にもああといひ、はれといふ、これなり。例へば、月花を見て感じて、ああ見事なる花ぢや、はれよい月かななどといふ。あはれといふは、あのああとはれとの重なりたるものにて、漢文に嗚呼などある文字をああと讀む、これなり。古言にあな又あやなどいへるあも同じ。又はやともはともいへるはも、かのはれのはと同じ。又後の世にあつぱれといふも、あはれと感ずる詞にて、同じことなり。

即ち、宣長の説明でもわかる通り、「あはれ」といふことは、よきにつけ惡しきにつけ、物に感ずることをいふので、「物」はただ添へていふこと、例へばただいふといつてよいところを「物いふ」といひ、ただかたるといつてよいところを「物がたる」といひ、その他、「物まうで」「物見」「物いみ」などいふたぐひである。「物のあはれを知る」といふことは、宣長の言葉を借りていふと、「何事にまれ、感ずべき事にあたりて、感ずべきこころを知りて感ずる」をいふのである。即ち感受性を活かせるといふ意味である。宣長は續けていふ、

必ず感ずべきことにありても、心動かず感ずることなきを「物のあはれ知らず」といひ、「心なき人」とはいふなり。物のわきまへ心ある人は、感ずべき事にはおのづから感ぜではえあらぬ業なるに、さもあらぬは何とも思ひ分くかたなくて、必ず感ずべき心を知らねばぞかし。

といつてゐる。そして文學を研究するのは、この「物のあはれ」を知るのであるといつてゐるのである。

蓋し、この「物のあはれ」を知らしめるといふことは、事實また文學の與へる大きな力であるといはなくてはならない。紀貫之の有名な古今集の序にも、

力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれ

と思はせ、猛き武士の心をも慰むるは歌なり。

とあるが、これ卽ち歌が「物のあはれ」を感ぜしめるからであるといへる。

本居宣長は、同じ書物の中で、小說の意義について次のやうにいつてゐるが、これは移して以て文學全體の意義を說いたものだといふことも出來る。卽ち曰はく、

物語は世の中にありとある、よきこと、あしきこと、珍しきこと、をかしきこと、面白きこと、あはれなることなどの樣樣を書きあらはして、徒然なる程のもてあそびにし、又は心のむすぼれて物思はしき折などの慰めにもし、世の中のあるやうをも心得て、物のあはれをも知るものなり。

と。實にいみじくもいひ得てゐるではないか。卽ち物のあはれを知るといふことは、世の中の樣樣の人間關係を、單に表面的ではなく、

底の底まで立ち入つて、深くしみじみと味はせることをいふのである。今日の新しい言葉でいふと、全圓的な人生味とか、全體としての人生の味などといふ意味である。そしてかういふ意味を味はせることこそ、實に文學の人生にもたらす最も大きな效果であるといへる。

だから、文學を本當に味つてゐる人、卽ち本當に物のあはれを感じてゐる人と、さうでない人とでは、その人の內生活は大變に違つてゐる。文學を味つてゐる人は、全體としての人生を見るから、同情心が非常にゆたかである。だから、例へばここに極惡無道の人間があつたとしても、それをすぐさま極惡無道な人間としては取り扱はない。どうして一般の人と同じ人間でありながら、彼のみがさういふ極惡無道な人間になつたかといふ逕路をまづ理解して、一概には彼を憎む氣持にはなれない。事實すぐれた文學は、その作者も

オセロー　沙翁の戯曲名でその曲の主人公の名。
イアゴー　オセロー中の人物の名。

さういふ同情心の深い人であるが、その作品にもさういふ同情心が溢れてゐる。例へば、わが元祿文學の代表者である近松門左衛門の「女殺油地獄」の主人公の油屋與兵衛といふのは、彼自らも後に悔恨して、「思へば廿年來の不孝無法の惡業が、魔王となつて與兵衛が一心の眼をくらまし」といつてゐる通りの極惡人ではあるが、この作を本當によく讀んだ人には、どうしてもこの與兵衛を本當に憎み得ない。境遇と性格とから自然にさうならざるを得なくなつたといふやうに感じて、彼を憎む前に、まづ同情する。大沙翁の作なども同じことで、或學者は沙翁のことを「萬人の心の人」といつてゐるが、沙翁は、實にハムレットにも、マクベスにも、オセローにも、更にイアゴーにも、同じやうな同情の心を持つて對してゐるのである。從つて沙翁の作を讀んでは、その作や人物が假にイアゴーのやうな惡人であつても、吾吾はそれを憎む氣持にはなれない。

アーノルド・ベンネット　イギリスの文學者。

本間久雄　文學者。文學博士。山形縣の人。早稻田大學教授。同大學英文科出身。明治十九年十月生まる。

かやうに見て來ると、「物のあはれ」を文學に依つて知ることは、同時に人生そのものを知ることだともいへる。アーノルド・ベンネットがその近著文學趣味構成法の中に、「文學の理解ある鑑賞といふことは、この世界の理解ある鑑賞といふことを意味する」といつたのと同じ意味だともいへる。文學の社會性や道德性は、すべてこの理解ある鑑賞といふことを基礎として、始めてその意義を展開して來る。

私はこの意味で「物のあはれ」を知ることに、まづ文學鑑賞の基礎を置く。

「物のあはれ」に關聯して考へたいのは、人間の心の影である。心理が複雜になればなる程、そこには心の影が濃くなる。だから、文學鑑賞の場合、この心の影を十分に味ふことが第一の緊要事である。

（本間久雄）

行平　阿保親王の子。在原氏を賜ふ。業平の兄。寛平五年薨ず。（一四七八年―一五五三年）

關吹き越ゆる　續古今集に、行平、「旅人の秋涼しくなりにけり關吹き越ゆる須磨の浦風」。

一一　須磨

須磨には、いとど心づくしの秋風に、海は少し遠けれど、行平の中納言の「關吹き越ゆる」といひけむ浦波、夜夜は、げにいと近く聞えて、また無くあはれなるものは、かかる所の秋なりけり。御前にいと人ずくなにて、皆うちやすみ渡れるに、ひとり目をさまし給ひて、枕をそばだてて四方の嵐を聞き給ふに、波ただここもとに立ちくる心地して、涙落つとも覺えぬに、枕浮くばかりになりにけり。琴をすこし搔き鳴らし給へるが、我ながらいとすごう聞ゆれば、彈きさし給ひて、

戀ひわびてなく音にまがふ浦波は
　思ふかたより風や吹くらむ

とうたひ給へるに、人人おどろきて、めでたう覺ゆるに忍ばれで、あいなう起き居つつ、鼻を忍びやかにかみ渡す。げにいかに思ふらむ、わが身ひとつにより親はらからをも別れ、片時だに立ち去りがたく、程につけつつ思ふらむ家を離れて、かく惑ひあへると思すにいみじくて、わがかく思ひ沈むさまを心細しと思ふらむとおぼせば、晝は何くれとたはぶれ言うち宣ひ紛らはし、つれづれなるままに色色の紙をつぎつつ、手習をし給ふ。珍しきさまなる唐の綾などに、さまざまの繪どもをかきすさび給へる屏風のおもてなど、いとめでたく見どころあり。人人の語り聞えし海山の有様を遙かに思しやりしを、御目に近くては、げに及ばぬ磯のたた

須磨の浦（源氏物語）

千枝、常則　共に平安時代の畫家として知らる。

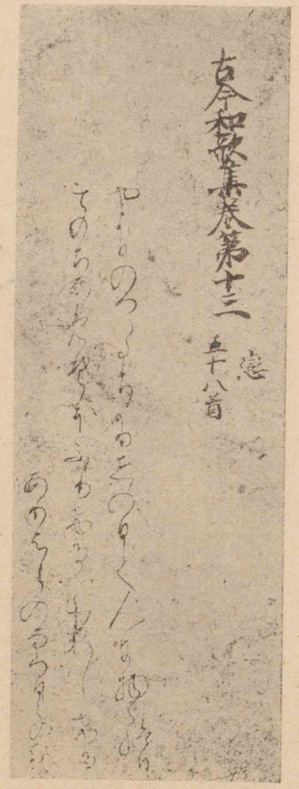
ずまひ、になくかきあつめ給へり。この頃の上手にすめる千枝、常則などを召して、つくり繪仕うまつらせばやと心もとながりあへり。懷かしうめでたき御有樣に、世の物思わすれて、近う馴れ仕うまつるを嬉しきことにて、四五人ばかりぞつと侍ひける。

前栽の花いろいろ咲き亂れ、おもしろき夕暮に、海見やらるる廊に出で給ひて、たたずみ給ふ御さまのゆゆしう清らなること、ところがらはましてこの世のものとも見え給はず。白き綾のなよよかなる御衣、紫苑色など奉りて、こまやかなる御直衣に、帶しどけなくうち亂れ給へる御さまにて、釋迦牟尼佛弟子と名のりて、ゆるらかに讀み給へるめでたさ、また世に知らず聞ゆ。沖より舟どもの謠ひののしりて漕ぎ行くなどもほのかに聞えて、ただ小さき鳥の浮べると見やらるるも、さまざま心細げなるに、雁のつらねて鳴く聲楫の音にまがへり。うちながめ給ひて御涙のこぼるるをかき拂ひ給へる御手つきの、黑木の御數珠にはえ給へるは、ふるさと戀しき人のここち皆なぐさみにけり。

古今和歌集　第十三　やよひのついたちよりしのびて人に物の給ひてのちあめそぼふるにつかはしけるありはらのなりひらの朝臣

良清　光源氏の近臣、源良清。前播磨守の子。

初雁はこひしき人のつらなれや
旅のそら飛ぶ聲のかなしき



傳紫式部筆

と宣へば、良清、

かきつらねむかしのことぞ思ほゆる
雁はそのよの友ならねども

民部大輔

民部大輔、

光源氏の近臣、藤原惟光。

前の右近丞　光源氏の近臣、伊豫介の子。

二千里外故人心　白樂天の詩句に「三五夜中新月色、二千里外故人心」。

心からとこ世をすててなく雁を
　雲のよそにもおもひけるかな

前の右近丞、

常世いでて旅の空なるかりがねも
　つらにおくれぬ程ぞなぐさむ

友惑はしてはいかに侍らましといふは、親の常陸になりて下りしにも誘はれで參れるなりけり。したには思ひ碎くべかめれど、ほこりかにもてなして、つれなきさまにしありく。

月のいと花やかにさし出でたるに、今宵は十五夜なりけりと思し出でて、殿上の御遊戀しく、ところどころに詠め給ふらむかしと思ひやり給ふにつけても、月の顏のみまもられ給ふ。「二千里外故人心」と誦んじ給へるに、例の涙もとどまらず。人人「夜更け侍りぬ」と聞ゆれど、なほ入り給はず。

上　今上朱雀院。

院　源氏の父帝。故桐壺院。

見るほどぞしばし慰むめぐりあはむ
　月のみやこははるかなれども

その夜、上のいとなつかしう昔物語などし給ひし御樣の、院に似奉り給へりしも戀しく思ひ出で聞え給ひて、「恩賜の御衣は今ここにあり」とずんじつつ入り給ひぬ。御衣はまことに御身放たず傍に置き給へり。

憂しとのみひとへに物は思ほえで
　ひだりみぎにもぬるる袖かな　（源氏物語）

煙のいと近く時時たちくるを、これや海人の鹽燒くならむと思しわたるは、おはします後の山に、柴といふ物ふすぶるなりけり。めづらかにて、

山がつのいほりに焚けるしばしばも
　ことととひこなむこふる里人　（源氏物語）

一二　紫のゆかり

一、

東路の道のはてよりもなほ奥つ方に生ひいでたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひはじめけることにか、世の中に物語といふもののあなるを、いかで見ばやと思ひつつ、つれづれなる晝間、宵居などに、母、姉などのやうの人人の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとどゆかしさまされど、我が思ふままに、そらにいかでかおぼえ語らむ。いみじく心もとなきままに等身に藥師佛をつくりて、手洗ひなどして、人まにみそかに入りつつ、「京にとく上げ給ひて、物語の多く候ふなる、あるかぎり見せ給へ」と身を捨てて額をつき祈り申すほどに、十三になる年、上らむとて、九月三日門出して、いまたちといふ所に移る。

東路の道の云云　上總國をさす。作者の父孝標の任國。

九月三日　寛仁四年。

いまたち　上總の國府附近の地名なるべし。詳かならず。

年頃遊び馴れつる所を、あらはにこぼち散らして、立ちさわぎて、日の入りぎはの、いとすごくきりわたりたるに、車に乘るとて、うち見やりたれば、人まには參りつつ額をつきし藥師佛の立ち給へるを、見捨て奉る、悲しくて、人知れずうち泣かれける。

二、

その春、世の中いみじう騷がしうて、乳母も三月一日に亡くなりぬ。せむかたなく思ひ歎くに、物語のゆかしさも覺えずなりぬ。いみじく泣き暮らして見いだしたれば、夕日のいと花やかにさしたるに、櫻の花殘りなく散りみだる。

散る花もまた來む春は見もやせむ
やがて別れし人ぞこひしき

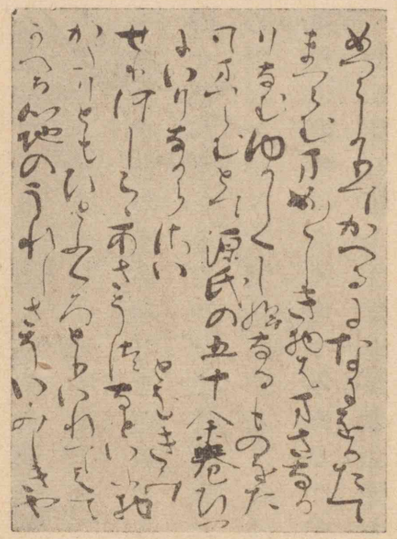
かくのみ思ひくんじたるを、心も慰めむと、心苦しがりて、母、物語などもとめて見せ給ふに、げにおのづから慰みゆく。紫のゆかりを

その春　作者が京に入りし翌年の治安元年の春。

紫のゆかり　「源氏物語」のこと。

見て、つづきの見まほしく覺ゆれど、人かたらひなども得せず、誰もいまだ都なれぬほどにて、え見つけず。いみじく心もとなく、ゆかしく、覺ゆるままに、「この源氏の物語、一の卷よりして皆見せ給へ」と心のうちに祈る。

親の太秦にこもり給へるにも、他事なくこのことを申して、出でむままにこの物語見はてむと思へど、見得ず。いと口をしく思ひ歎かるるに、をばなる人の田舍より上りたる所にわたいたれば、「いとうつくしう生ひなりにけり」など、あはれがり、めづらしがりて、かへるに、「何をか奉らむ。まめまめしきものは、まさなかりなむ。ゆかしくし給ふなるものを奉らむ」とて、「源氏」の



更級日記古寫本

太秦　今京都市右京區太秦にある廣隆寺。

めづらしかりてかへるになにをかたてまつらむまめ〳〵しき物はまさなかりなむゆかしくし給なるものをたてまつらむとて源氏の五十餘卷ひつにいりながらさいことをきみせり河しらゝあさうつなどいふ物かたりともひとふくろとりいれてえてかへる心地のうれしさそいみしきや

在中將　「伊勢物語」のこと。

とほぎみ云々　以下すべて物語の名。今傳はらず。

五十餘卷、櫃に入りながら、「在中將」「とほぎみ」「せりかは」「しらら」「あさうづ」などいふ物語ども一ふくろとり入れて、得てかへる心地の嬉しさぞいみじきやはしるはしる、わづかに見つつ、心も得ず心もとなく思ふ「源氏」を、一の卷よりして、人もまじらず、几帳のうちにうち臥して、引き出でつつ見る心地、何にかたとへむ。晝は日ぐらし、夜は目のさめたるかぎり、火を近くともして、これを見るより外のことなし。

おのづから名などは空におぼえ浮ぶを、いみじき事に思ふに、ある僧の來て、「法華經五卷をとく習へ」といへど、人にも語らず、習はむとも思ひかけず、物語のことのみ心にしめて思ひける心、まづいとはかなくあさまし。（更級日記）

一三　清文私評

一、春は曙

春は曙。やうやうしろくなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。夏はよる。月の頃はさらなり、闇もなほ螢飛びちがひたる。雨などの降るさへをかし。秋は夕ぐれ。夕日はなやかにさして、山のはいと近くなりたるに、烏のねどころへ往くとて、三つ、四つ、二つなど飛びゆくさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いとちひさく見ゆる、いとをかし。日入りはてて、風のおと、蟲のねなど、いとあはれなり。冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず。霜などのいとしろく、又さらでもいと寒きに、火などいそぎおこして、炭もてわたるも、いとつきづきし。晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、炭櫃、火桶の火も白き灰がちになりぬる

はわろし。

我我日本人ぐらゐ、自然といふものに對しての深い憧憬をもつてゐる民族は、他に恐らくあるまい。我我の祖先の生活は自然に支配され、或は時に盲從してゐる。それ故、我我の有する文學、美術には、自然を對象としてその美を發揮することを努めたものが頗る多い。よし對象とせぬまでも、自然を背景とせぬものは殆どない。だから、わが文學、美術から自然を切り離して見ることは到底不可能なことである。かうした國民性をもつた我我の祖先が、動もすれば四季の風物をいひ、花鳥風月を歌つたのは、蓋し當然である。

四季の風物に對しての好惡は、甚だ複雜な聯感が伴ふものであるが、直覺的には、觸感の刺戟に本づくことがその大部分であるから、春秋二季は殊に快的な時節と認められ、つひにこの二季

空穗物語　二十卷。源氏物語以前に出でたる小說。作者詳かならず。

の優劣は人人の口頭語となり、詞人がその才藻をきそふ好題目となり、或は春に袒を入れたり、或は秋に心を寄せたりして、彫心鏤骨、詩壇の一佳典を作るやうになつた。けれど、一派の詞人は、四季おのおの特色があり好處があることを認めて、頗る公平な見地からその推稱を怠らなかつた。すなはち平等に四季の景趣を讃したものには、この草子以前に空穗物語があり、同時に源氏物語があり、後世には徒然草がある。中にも傑出したのをこの文とする。蓋し清女一流の敏警な觀察と、引き締つた齒ぎれのよい筆致とは、とても他の眞似の出來ない妙處で、實にわが國文中の異彩である。

やはらかい輪郭を作つた東山の峯に、ほのぼのと別れてゆく横雲の空は、京うまれの清女が幼少から見馴れて、印象ふかく感じた景色であらう。また雨に對する厭惡の念が、今のわれわれの

小大君集　一卷。三條天皇の女藏人小大君の和歌を集めたるもの。

想像以上に強かつた當時において、「雨などの降るさへをかし」と道破したのは、よく時代を超越して自然の趣味を解し得たものである。「三つ四つ二つ」の辭樣の參差は、烏のまばらに飛んでゆく狀を形容し得ておもしろい。「ちひさく見ゆる」は雁が山飛び越えて去來する光景で、京都の地勢上常にありがちなことである。稀には低く飛ぶこともあらうが、下文にも「雁の聲は遠く聞えたるをかし」といつてゐるのを見ると、それは清女の嗜好に適はなかつたものだらう。否恐らくは近い雁に詩味を感得するほどの機會と經驗とをもたなかつたのだらうと推察される。「火などいそぎおこす」に寒氣をおそれた趣が現れてゐる。「炭もてわたる」は彼方此方の火桶、炭櫃に女官達が炭つぎまはる光景であらう。小大君集に、

殿上に炭もてくる男を、おそく參りたりとて藏人のとらへ

かしらの繩

大原　京都府愛宕郡。

て、髪に繩をゆひ付けて宥さざりしかば、女房方よりよみてやる。

おほはらや炭のかしらの繩ゆるせ
このめに涙うかぶといふなり

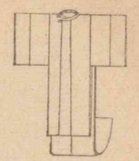
これによると、當時の禁中御用の炭は、大原の炭竈からぢかに上納したものと見える。納入の時期がおくれたとて、その炭燒の長を折檻するのは甚しい亂暴のやうだが、まことに炭なしには片時も居られぬから仕方がない。天井はなし、大間ではあり、四方かけ拂ではあり、日あたりもとかく不十分な當時の殿舍では、寒さはさこそと想ひやられる。そこで火おこすも、炭もてわたるも、頗る有意味な譯となつて、つきづきしくも、をかしくも、餘計に感ぜられるのである。

時刻を四季に配當して、その特色を紹介したこの企は、空前の

新案である。さて春は曙、夏は夜、秋は夕ぐれ、冬は早朝の四綱目がまづ出來て、次にその細說を試みるに當つて、春夏秋は專ら敍景につとめ、冬には人事を配して內容に變化あらしめ、また春夏を輕輕に評し去つて、秋冬に力をそそぎ、また春夏秋は專らその好處をのみ擧げ、冬には「畫になりて――わろし」と抑損の轉語を下したなど、筆法が變化に富んでまことに面白い。しかも文の樣式が整然として、その結構から、布置から、一寸のたるみもない。初學者の模範を取るには最も都合のよい文體の一つであらう。

殊に注意すべきは春の曙と秋の夕暮とである。この文が一度世に出てから、この二つは吟詠の好題目となつて、千載の下、今もなほ歌人の口の端に乘つてゐる。以てその觀察がただ奇警といふばかりでなく、極めて妥當であることが證明される。

二、あてなるもの


汗衫

薄色に白がさねの汗衫。かりのこ。けづり氷のあまづらに入りて新しきかなまりに入りたる。すゐさうの數珠。藤の花。梅の花に雪のふりたる。いみじう美しきちごの覆盆子くひたる。

紅白淺紫の色彩に形相光澤の美が入りまじつて、一篇玉のやうな詩である。作者の心のひかりが透き徹つて見える。汗衫や藤の花はその紫色が頗る品よく感ぜられる。殊に平安人士の嗜好には深くかなつた色相で、單に濃い薄いといへば紫色のことである程に、一般的好尚となつてゐた。下文にも「紫は何も何もめでたし」といつてゐる。水晶の數珠、家鴨の卵の品のよいのは素よりのこと、金椀は銀で、梅はかならず紅梅でなくてはならぬ。さてこそ氷も雪も調和が美しいのである。乳兒の覆盆子は紅梅の雪とおなじ配色の美であるが、「食ひたる」の一語に乳兒の愛らしげな動的の情致が動いて見える。

今日氷に甘露をさすとは反對に、削氷が甘葛に入るとあるので、その氷の分量が少くつて貴かつたことが想像される。しかもこの甘葛が砂糖とはちがつてあまり感心した物でもないが、大御酒まゐつて氷水召せば、その頃の上流社會の大した奢であつた。

宮　一條天皇の皇后藤原定子。當時中宮。

香爐峯の雪　白氏文集に「遺愛寺鐘欹枕聽、香爐峯雪撥簾看」。

三、香爐峯の雪

雪いと高く降りたるを、例ならず御格子まゐらせて、炭櫃に火おこして物語などして集まり侍ふに、宮「少納言よ、香爐峯の雪はいかならむ」と仰せられければ、御格子あげさせて、御簾高く卷き上げたれば、笑はせ給ふ。人人も皆さる事は知り、歌などにさへうたへど、思ひこそ寄らざりつれ。人人「なほこの宮の人にはさるべきなめり」といふ。

雪とさへいへば、慄へながらもめでたがつた人達が、格子をお

公任
藤原公任。

ろして話し込んでゐたのは蓋し異例である。皇宮の「香爐峯の雪は」の提唱は、格子をあげさせたく思し召しての御方便であつたらう。

香爐峯の句は菅公の名句「都府樓纔看瓦色、觀音寺只聽鐘聲」の藍本として著名であり、公任もその朗詠集中に收めたほどで、當時誰知らぬ者もない。「撥簾看」は皇宮の豫期して居られた歸結だが、唯それを女房達が、どんな鹽梅に扱ふか、どんな形式で發表するかに興味をもたれたのである。女房達の中には折角思ひ寄つても、氣の利いた御答が出來ないので躊躇した者もあらうが、清女の如く何もいはず、すつと起つて簾を捲き上げる態度に出ることは知らなかつた。これは單なる聯想だけで終るのではなく、更に體現して見せたのである。しかも咄嗟の仕事だけに、いよいよその敏慧さに驚かされる。清女が再三名聲を博したのは文辭上、口舌上の才鋒であつたが、これは更に一歩を進めた仕打である。清女の手柄話は數ある中に、こればかり後世まで特に傳稱された所以もそこにある。

清少納言（下條桂谷筆）

「然るべきなめり」が、清女の才女なことを直接に保證すると同時に、「この宮の」が皇宮の才學に勝れた御方であることを間接に保證してゐる。

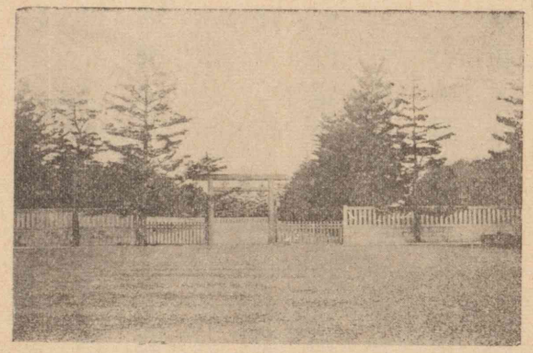
（金子元臣――枕草子評釋）

熊野村　和歌山縣牟婁郡の古稱。

一四　神武天皇の御東征

神倭伊波禮毘古命其處より廻りて、熊野村に出でませる時に、大きなる熊、出で入るとほのかに見えて卽ち失せぬ。ここに命俄かに醉心地になりまし、また御軍も皆醉ひ臥したりき。この時に熊野の高倉下刀を齎ちて、天神の御子の臥し給へる處にまゐり來て獻る時に、御子忽ち寤めまして、「長寢しつるかも」と詔り給ひき。乃ちその刀を受け取り給ふ時に、その熊野山の荒ぶる神自ら皆切り仆されて、かの醉ひ臥したる御軍ことごとく寤めたりき。

御子よりてその刀を獲つる故を問ひ給へば、高倉下みこたへ申さく、「おのれ夢に天照大神、高木神の建御雷神を召して詔り給はく、『葦原中國はいたくさやぎてありけり。我が御子達惱みますらし。かの葦原中國は專ら汝が言向けつる國なれば、汝降りて治めよ』とのり給ひき。建御雷神みこたへ申して、『おのれ降らずとも、專らかの國平けし刀有れば降りてむ。高倉下が倉の棟を穿ちて、そこより墮し入れむ』と申し給ひき。さて建御雷神おのれに、『汝が倉の棟を穿ちて、この刀を墮し入れむ。汝取り持ちて、天神の御子に獻れ』と敎へ給ひき。乃ち夢の敎のままに、つとめておのが倉を見たるに、誠に刀ありき。そは獻るこの刀にこそ」と申しき。



畝傍御陵

ここに亦高木神、御子の命に、「ここより奥つ方にな入りましそ。荒ぶる神いと多かり。今天より八咫烏をおこせむ。その道引きのままに後よりいでますべし」と諭し申し給ひき。よりてそのみさとしのままに、その八咫烏の後より出でましき。

宇陀　奈良縣宇陀郡宇賀志村

ここに宇陀に、兄宇迦斯、弟宇迦斯の二人ありけり。先づ八咫烏を遣はして、二人に、「今天神の御子いでませり。汝ども仕へまつらむや」と問はしめ給ひき。然るに兄宇迦斯、鳴鏑をもちてその使を待ち設けて射返しき。その鳴鏑の落ちたりし地を訶夫羅前といふ。兄宇迦斯、御子の御軍を待ち擊たむとて軍を聚めしかども、得聚めざりしかば、仕へまつらむといつはりて大殿を造り、その殿の内に押機を張りて待ちける時に、弟宇迦斯まづ御子の命の許に參り來て、拜みて白さく、「あが兄兄宇迦斯、天神の御子の使を射返し、待ち攻めむとして、軍を聚むれどもえ聚めざれば、殿を造りその内に押機を張りて待ち取らむとす」と白しき。ここに大伴連等が祖道臣命、久米直等が祖大久米命二人、兄宇迦斯を召して罵りていひけらく、「汝が作れる大殿の内にはおのれまづ入りて、その仕へまつらむとする狀を明かしまをせ」といひて、即ち刀の欄を取りしばり、矛執り矢刺して

たちそば

いちさかき

忍阪　奈良縣磯城郡忍阪村。

追ひ入るる時に、兄宇迦斯おのが張りおける押機に打たれて死にき。即ちひき出だして斬り屠りき。其處を宇陀之血原となむ謂ふ。

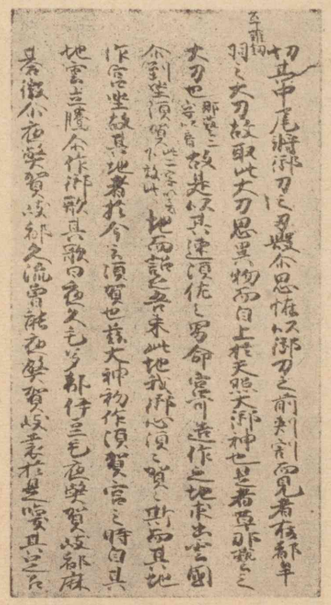
然してその弟宇迦斯が獻れる大饗をば、ことごとくその御軍どもに賜ひき。この時に御歌よませ給ふ。

宇陀の高城に鳴罠張る。わが待つや、鳴はさやらず、いすくはし、くぢらさやる。前妻が、魚乞はさば、たちそばの實の無けくを、こきしひゑね。後妻が、魚乞はさば、いちさかきの實の多けくを、こきだひゑね。えええしや。こしや。ああしや、こしや。

其處よりいでまして、忍阪の大室に到りませる時に、尾ある土雲八十建その室に在りて、猛り立ちて待つ。ここに御子の命の仰をもちて、八十建に饗を賜ひき。その時八十建に宛てて、八十膳夫を設けて、おのおの刀を佩ばしめ、「歌を聞かばもろともに斬れ」と誨へ給ひき。その土雲を擊たむとすることを明かせる歌、

くぶつつい

忍阪の、大室屋に、人さはに來入り居り、人さはに入り居りとも、みつみつし久米の子が、頭椎い石椎いもち、擊ちてしやまむ。みつみつし、久米の子等が、頭椎い石椎いもち、今擊たば善らし。



古事記（眞福寺本）

かく歌ひて刀を拔きて一時に打ち殺しつ。

その後登美毘古を擊ち給はむとせし時の大御歌、

みつみつし久米の子等が、粟生には韮一莖、其根が莖、其根芽つなぎて擊ちてしやまむ。

また、

しただみ

みつみつし久米の子等が垣下に植ゑし薑、口ひびく、吾は忘れじ、うちてしやまむ。

また、

神風の伊勢の海の、大石にはひもとろふ、細螺のい這ひもとほり、うちてしやまむ。

又兄師木、弟師木を擊ち給へる時に、御軍暫しは疲れてありき。その時の大御歌、

楯並めて伊那佐の山の木の間よも、い行きまもらひ戰へば、吾はや飢ぬ、島津鳥鵜養がとも、今助けに來ね。

かくのごとく、荒ぶる神どもを從へやはらげ、參り來ぬ人どもを拂ひたひらげ給ひて、畝火の白檮原宮にましまして天の下しろしめしき。（「古事記」による）

海犬養岡麿
傳詳かならず。

橘諸兄
美努王の子。元明天皇以下四朝に歴仕し左大臣正一位に至る。世に井手左大臣と稱す。天平寶字元年正月薨ず。（一三四四年―一四一七年）

碁檀越妻
傳詳かならず。

一五　御民われ

海犬養岡麿

みたみわれいやとしさかり天地の
栄ゆるときふあつらくおもへば

橘諸兄

石ゐなかのしら髪までにおほきみ
つかへまつれば苦しかりけり

碁檀越妻

神風の伊勢の濱荻折伏せて
こびねやすらむ旅にしあらねば

大伴家持
旅人の子。延暦中、中納言、征夷大將軍となり蝦夷を伐つ。延暦四年八月薨ず。（一一四四五年）

碁檀越往伊勢國時留妻作歌一首
神風之伊勢乃濱荻折伏客宿也將爲荒濱邊
爾

寛永版本

大伴家持

まそかがみ見なれしこころ見ずあれば
こころ慰もしのにけるかも

作者未詳

高きしるしの山とこの國人の
さすらふ四方にあるらしも

山上憶良
大寶中遣唐小錄となり入唐す。伯耆守、筑前守に歴任す。天平五年六月卒す。（一三二〇年―一三九三年）

柿本人麿
持統、文武兩天皇に仕ふ。後官に石見に卒すといふ。

吉野川
吉野山の麓を流れ紀伊に入る。

子等を思ふ　山上憶良

瓜食めば子供思ほゆ栗食めば増して思はゆ何しかもまなかひにもとな懸りて安寢なさぬ

反歌

白金も何せむにまさる寶子にしかめやも

吉野宮に幸しませる時よめる　柿本人麿

安見兒得たりわが大君神ながら神さびせすと吉野川たぎつ河内に高殿を高知ますと上り立ち國見をすれば畳なはる青垣山山神のまつる忌瀧と畏べは花ぞ散しもち祝へば紅葉かざせり遊ぶ鮎川の神も大御食に仕へまつると上つ瀬に鳥網張り渡し下つ瀬に小網さし渡す山川もよりて仕ふる君が御代かも

反歌

山川もよりてつかふる神ながらたぎつ河内に船出せすかも

不盡山を望みてよめる　山部赤人

天地の別れし時ゆ神さびて高く貴き駿河なる不盡の高嶺を天の原ふりさけみれば渡る日の影も

山部赤人
聖武天皇に仕ふ。柿本人麿と名を齊しうす。

かきくらし照る月の光もみえぬまでふるいゆき降り
時ぞこそ雪はふりつゝ降りつゝ降りつゝゆくも不盡の嶺ハ

山部赤人（岩佐又兵衛筆）

反歌

田子の浦ゆうちいでてみれば真白にぞ不盡の嶺に雪はふりける

田子の浦　靜岡縣庵原町吹上の邊の舊名。

一六　萬葉歌人

柿本朝臣人麿は、いにしへならず後ならず、一人の姿にして、荒御魂、和御魂いたらぬ隈なむなき。その長歌、いきほひは雲風に乘りて御空ゆく龍のごとく、言葉は大海の原に八百潮の湧くがごとし。短歌のしらべは葛城の襲津彦眞弓を引きならさむなせり。ふかき悲しみをいふ時は、千はやぶるものをも泣かしむべし。

柿本人麿（宅磨榮貨筆）

山上臣憶良は、言葉ふつつかにして心うつくし。久米の伴の雄雄しき姿して、たつつ舞ひたらむおもほゆ。

山部宿禰赤人は、人麿とうらうへなり。長歌は心も言葉もただにきよらをつくせり。短歌こそこれも一人の姿なれ。巧をなさず、あるがまにまにいひたるが、妙なる歌となれるは、本の心の高きがいたりなり。譬へば、檳榔の車して大路をわたる主の、あからめもせぬがごとし。

大伴宿禰旅人のまへつ君の短歌は、雄雄しくてかなし。酒を詠めるに、すめら御國の心をいへるはたふとし。こはしらべを棄てて心をぞ取るべき。長きは知らず。

それが繼なる家持の主は、事をよく記して匂なし。譬へば、いでましの大御伴のつらをめでたく記せるふみのごとし。短歌はいと多かれど、あらびて、うらぐはしきは稀になむある。

（賀茂眞淵―賀茂翁家集）

一七　斷光錄

一、苦痛の祕義

苦痛の刹那、人は往往默して聖者となる。苦痛の前には一切の煩惱薄きこと霧の如く、眼中の山河大地も、幻の如くに漂ひ去らんとす。一念卽一切、一切卽一念は正しくこの境の光景なり。この時吾人は往往一種清涼の感を覺ゆることあり。

大いなる苦痛の刹那、人に誇るべき何ものありや、恃むべき何ものありや。その好む所は何ぞ、その願ふ所は何ぞ。彼はた何をか戀ひ慕ひ、何をか思ひ煩ひ、何をか恐れ惑ひ、何をか跪き惱むぞ。およそありとある迷執薫染の源なる我等が心の小壺の古黴は、一念清淨の水に迹なく洗ひ去られて、中に燃ゆるは唯沈痛嚴肅なる苦痛の燄のみ。苦痛の燄は畏るべし。しかもそは往往にして能く百煩惱の束

縛を解く。苦痛三昧はしばしば清涼三昧なり。

苦痛は必しも恐れ詛ふべきものにあらず。苦痛は時に吾人を神に詣でしむる試煉の聖殿たり。嗚呼人生の行路に慘痛の涙あり。しかも吾人はこの涙に煉り淨められて、しばしば赤子天眞の心に立ち還るを得るなり。かくの如きは實にこの不可思議なる神の世界の一祕義なり。これ浮泛の語にあらず、われはわが病床に於いて曾てしばしばこの祕義を味へり。

苦痛は人をして至誠ならしむ、眞面目ならしむ、我執我慢を脫せしむ。而して又時に神祕の靈力を直覺する大勇の道士たらしむ。語に曰はく、「苦しい時の神頼み」と。「人疾痛慘憺に會して、いまだ曾て天を呼ばずんばあらず」と古人も道ひき。これむしろ人情の至極なり。而して人情至極の煥發、これ實に神の最も近く在します宮居にあらずや。孔子の極めて實際的氣質なるだに、なほその陳蔡の野に苦しむや、天てふ超自然力に我の存在を結びて、以て自ら彊うし自ら勵ましたり。苦痛に祕義あり、「我が神、我が神、何ぞ我を捨て給ふや」の基督の一語、嗚呼世にこれほど深奥無量の苦痛の祕義あるべしや。この一語、只只我等が一代の血涙を灑ぎ盡して味ふべきなり。語る能はず、說く能はず。

陳蔡の野に云云

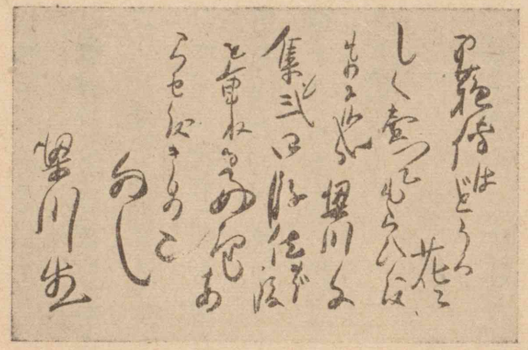
陳蔡の大夫謀りて孔子を野に圍みて糧を絕つ。從者病みて能く起つものなし。孔子講誦絃歌して衰へず、弟子の慍色あるを知り、子路を召して「詩云、匪兕匪虎、率彼曠野、吾道非耶、吾何爲於此」といへること史記孔子世家に出づ。

我が神云云

新約全書馬太傳に出づ。

耶蘇傳はどうか花々しく賣つてもらひ度ものに候哉梁川文集も三四版位まで版を重ねる好望あらせ度きもの也　匆々

梁川生



綱島梁川筆

二、自大自矜の一念を愼めよ

吾等をして自大自矜の一念を愼めよ。吾等にして若し絕對無上の眞理を攫めりとも、吾等は竟にこれ神にあらず、如來にあらず。基督だに曾て自己を神なりとは宣せざりしにあらずや。吾等は竟に神にあらず。吾等は神の子なり、神の大愛に連なる一分身なり、一箇識なり。神人合一の刹那

の境に於いてだに、吾等は全く神とはならず。ただ一息間なき靈交の自覺に入れるのみ。我は神の溫かなる懷に抱かれながら、依然としてなほ我たり。

嗚呼ここに吾等が永へに居るべき眞地位はあるなり。而して權威と光榮と、亦實にここにあり。吾等をして漫に自悟自覺の一念に思ひあがらしむる勿れ。吾等悟れりといへども、なほ神にあらず。否、悟そのことが神よりの恩寵なり。我は世の絶對の眞理を悟れりと稱する自覺者の態度に、歸依敬虔の一味なきをいとといと惜しとするものなり。

三、自　然

春は歌ひ、夏は働き、秋は考へ、冬は徹す。徹して而して歌ひ、歌うて而して働き、働きて而して考へ、考へて而して徹す。大河の水と流れ、梵音の響と續きて、一氣貫穿、自彊しばらくも息まざるもの、これ「自然」てふ大いなる靈魂の呼吸にあらずや。

歌ふや充實す、春潮洋洋たり。働くや充實す、夏雲滃滃たり。考ふるや充實す、秋の野に千里空明の觀念平かに、徹するや充實す、冬の空に涅槃實相の姿圓かなり。

自然の運行は、歩歩節節悉く充實して、一瞬やがて三世を渦卷きめぐる。古池に蛙飛び込む水の音は、聲聲やがて久遠に響きつらなる轉法輪にあらずや。鳶飛び魚躍り、風吹き水流る。自然の何物かこれ一氣の充實ならざる。充實は卽ち誠なり。誠は卽ち天地の大悅なり。

神を信ずるものは人を信じ、人を信ずるものは自然を信ず。かくて我等は熱き涙を頑石の面に濺ぎ、優しき念を荒海の胸に抱くを得るなり。（綱島梁川―回光錄）

一八　三餘の窓

一、多言など誡むべきこと

人は慮なく、いふまじき事を口とくいひ出だし、人の短きをそしり、したる事を難じ、かくすことを顯し、恥ぢがましき事をただす。これらはすべてあるまじきわざなり。我は何となくいひ散らして思ひも入れぬほどに、いはるる人は思ひつめて、いきどほり深くなりぬれば、はからざるに、恥をも與へられ、身のはつるほどの大事にも及ぶなり。ゑみの中の劍は、さらでだにも恐るべき物ぞかし。又よくも心得ぬ事を、あしざまに難じつれば、却りて身の不覺あらはるるものなり。大方口かろき者になりぬれば、某にその事な聞かせそ。彼の者にな見せそなどいひて、人に心を置かれへだてらるる、口をしかるべし。又人のつつむ事のおのづからもれ聞えたるにつけても、かれはなされしなど疑はれむは、面目なかるべし。然れば、かたがた人のうへをつつしみ、多言を止むべきなり。

二、才能を庶幾すべきこと

本よりその道道の家に生まれぬるはさる事なり。さなき類も、ほどほどに付けて、能はかならずあるべきなり。中にも氏を承けたる者、藝おろそかにして氏をつがぬ類あり。道にあらざる類、能により て道にいたる德もあれば、氏をつがむがため、道にいたらむがために、彼も是もともに勵むべし。何となくゐまじりたる折は、そのけぢめ見えざれども、藝能につけて召し出だされ、只うちある我どちのあそびにも、かたへに拔けいでて、何事をもしたらむは、雲泥の心地して、人目いみじく覺えぬべし。すべて、みめよく品高けれども、あやしく賤しきが能あるに立ちならぶ折は、その品そのみめも、かならず思ひ消たるるものなり。

たとへば、花のあたりのときは木は、うちみるに、たとへなくさめたれども、春の日かずくれ、峯のあらし過ぎたる後に、みどりばかり殘りて、かりの匂とどまらざるがごとし。されば「桃李は一旦の榮華なり、松樹は千年の貞木なり」といへり。いみじくありて、身の能なきが一人あるを見るだに、能あるを思ひ出づるならひなり。況や能にならぶ折のけぢめをや。いかに況や、同じ樣なるが、一人は能ありて一人は能なきをや。

桃李は一旦の云云　聖德太子傳に出づ。

中にも、世の中のかはり行くさま、むかしよりは次第におとろへもて行くにつけつつ、道道の才藝も、また父祖には及びがたき習なれば、藍よりも青からむことは、まことに希なりといへども、形のごとくなりとも、箕裘の業をつがざらむ、くちをしかりぬべし。

（十訓抄）

藍よりも青からむ云云　荀子に「青取之於藍、而青於藍」。

一九　祭のことば

ここに文化の五とせ九月八日、平春海謹みて芳宜園大人のおくつきの御前に、菊の初花一枝をたむけ、香の木一ひらを焚きて、うなね突きて申さく。

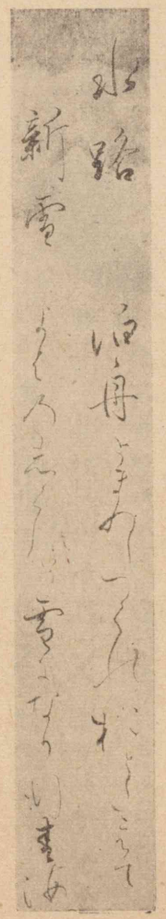
村田春海

縣居　賀茂眞淵の號。

あはれ悲しきかも。君は我に十といひて一とせのこのかみにおはすなるが、今そのかみを思ひ出づるに、君はまさにさかりの齡におはして、我はまだ童にてぞ侍りける。常に縣居の庭に物まなびにゆきかひたる時、朝に參るとては君の御はかしの後へに從ひ、夕べに退るとては君の御袖のもとにすがりて、あひうるはしみまつれること、親子、はらからにも何か異ならむ。書讀むとては、君を師ともたふとみ、歌作

水路新雪
泊舟とまのしづくのおとたえてよはのしぐれぞ雪になり行　春海

るとては、我をおととひのつらにぞ教へ給ひける。中頃にして、君はつかへの道に暇なくおはし、我は世のさがにかかづらひて、おのづから疎き方にも過ぎつるを、君つかへを退き給ひて後は、我も同じ衢に移り住めば、花を尋ぬとてはわれ道しるべをなし、月を思ふとては君が舟にあひ乘り、憂きことも共に愁へ、うれしき節も共に喜びて、世にありふる業の、まめ事も、あだ事も、かたみに隔なく心をかはせること今にはたとせ、そのはじめを繰りかへし數ふれば、あひ友たること既に五十とせにぞ餘りける。さるを今おくれ奉りて、いつの世にかあひ見む、いづれの時にか言とはむ。常なきは人の身のならひぞと知れども、これをいかでか歎かざらむ、かかるを誰かは


村田春海筆

株を守り
韓非子に、「宋人有耕者、田中有株、兎走觸之、折頸而死、因釋耕守株、不復得兎、爲宋國笑也」。

舟にきだつくる
呂氏春秋に、「楚人、劍自舟中墜水、遽契其舟曰、是我劍所從墜也、舟已行、而劍不行、不亦惑乎」。

よく堪へむ。

あはれ文の林世世に衰へ、言の葉の道日日に下り行けるを、賀茂の翁世に出でて、今を捨てて古にかへり、青雲の高き心しらひを求め、倭文機のあやあるみやび言を尊みいへれど、株を守り、舟にきだつくるともがら、彼に泥み此處にひかれて、なほ怪しみ咎むるたぐひは多く、魂あひてよくうけひく人なむ稀なりしを、君ひとり心をおこして、遍く諭し廣く誘ひしより、近き人はまのあたりあひうづなひ、遠き人は遙かに靡き來て、古ぶりの歌世にさかりになりにけるは、まことに君の力によりてなり。

そのみづから詠み出で給へる歌を見るに、古き調、新しき姿とりどりに備らざるなし。その古をうつせるは藤原、寧樂の御世におよび、後の巧に習へるは堀河、鳥羽の御時に下らず。心に思ふことは口に盡さざることなく、目に觸るるものは詞にのぼせざることなむ

あらざりける。これを見て、高きもみじかきも愛で尊ばざる人なし。また事ごのみの人は、その名を君に知られては、身のおもておこしと思ひて世にも誇り、君の一歌を得ては、價なき寶にも換へじといひてぞ深く喜びける。

さるを、いま金の聲たちまち止みて、玉のひびきふたたび聞えずなりぬるは、わがどちのなげきのみかは、おほかたの世人の憂ともいひつべし。これをいかでか惜しまざらむ、かかるを誰かは慕はざらむ。

あはれ悲しきかも。わがかくことあげするを泉の下にもさやかに聞し召し、天翔りても遙かに見そなはせとなむ申す。

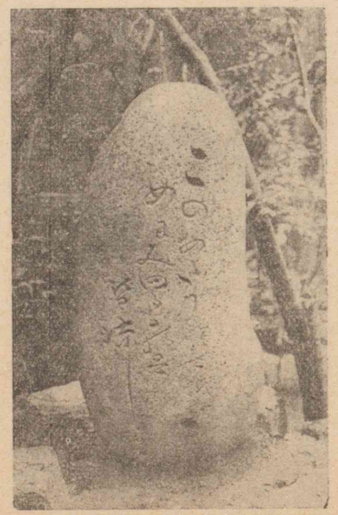
（村田春海―琴後集）

村田春海　江戸の國學者。春道の子。通稱平四郎、織錦齋又琴後翁と號す。眞淵の門人。文化八年二月歿す。（一七四〇六年―一八四七年）

二〇　俳文二篇

一、十八樓の記

美濃の國長良川に臨みて水樓あり。あるじを賀島氏といふ。稻葉山うしろに高く、亂山左右にかさなりて、近からず遠からず、田中の寺は杉の一村に隱れて、岸に沿ふ民家は竹の圍みのみどりも深し。瀑布ところどころに引きはへて、右に渡し船浮ぶ。里人行きかひしげく、漁村軒をならべて、網をひき釣を垂るる、おのがさまざまも、ただこの樓をもてなすに似たり。暮れ難き夏の日も忘るばかり、入日の影も月にかはりて、波にむすぼるる篝火の影もや



芭蕉翁句碑（十八樓庭内）

瀟湘の云云
平沙落雁、遠浦歸帆、山市晴嵐、江天暮雪、洞庭秋月、瀟湘夜雨、煙寺晚鐘、漁村夕照。

西湖の云云
蘇堤春曉、平湖秋月、花港觀魚、柳浪聞鶯、兩潭印月、三峯出雲、南屏晚鐘、雷峯落照、麯院荷風、孤山梅雪。

や近く、高欄のもとに鵜飼するなど、まことにめざましき見ものなりけらし。かの瀟湘の八つのながめ、西湖の十の境も、涼風一味のうちにおもひためたり。もしこの樓に名をいはむとならば、十八樓ともいはまほしきなり。

このあたり目に見ゆるもの皆涼し

（松尾芭蕉）

二、武陽官邸の記

百里の海山かぎりなく越え來たる目には、ここに一年の起き臥しはと、顏に物のふたがるやうに覺えしが、今日よ明日よと、住めば都の月もさし入りて、寢心よき夢も結ぶばかりにぞなりける。

四疊ばかりのところに、手近き調度ども片づけて、常の居どころに定めつ。庭は二三間に穴藏なかばの場をふさぎて、殘れるところわづかなるに、誰植ゑすてし、一もとの石菜（つは）、二もとの躑躅、花は時過ぎて青葉つややかに、我たのみ顏なるを、そこここと植ゑかへなどして、朝夕の水そそぐも、うき身忘るるたづきとぞなれりける。

軒の風鈴に夏山の涼しさを招き、壁のやぶれに色紙をおし、障子の足らぬにあやしき簾をかけて、月の夕暮なかば卷きたるは、かの行平の須磨の住居もかくやと思ひ出でらるるに、うしろの松風とうとうと吹き鳴らせば、「波ここもとに」などぞひとりごたるる。

西あかりの二階窓、御土居間ぢかく、梢さしおほひて遠望をさへぎれども、富士は木の間にくまなく、蠣殼屋根はるかに見越して時しらぬ雪をあらそふ。

常に花やかなる往き來は、まれに音なふもの、念佛、題目、代待ち、代參り、あるは木魚のひびきかすかに、箔置の佛になひて、建立奉加の鉦さわがしけれども、心の動くべくもあらず。

鄰は一重の壁をへだてて、朝の火打の音ひびくより、摺鉢に客待つ日も、烟草きる日のつれづれなるも、紙帳に團扇の寢しづまるま

で、こなたに物の隱れなければ、かしこも亦隈なく知りかはすなるべし。

日數經るままに、從者どもも所得がほに、貧乏樽に唐辛子を植ゑて紅の秋を待ち、葭垣に刀豆を這はせ、塵塚に蓼を育てて、鮓賣の聲をわぶるなど、かく不自由のくらしを、商人はかしこく、餅を艾の底に忍ばせ、酒に味噌桶の贋銘を書きつけ、御門の咎めをのがるるもをかしき業くれにて、煮豆、和物に朝夕の飯時を考へ、雨のあがりは灸賣るなど、なかなかをかしき住居のさまなりけり。

されば阿房の雲を凌ぐも、煤拂ひのやかましからむに、かたつぶりの戸一枚もたでも、浮世はぬめりわたりなるをや。足るも足らぬも住む人の心にして、我は故郷の外とも思はずと、この心を額に題してぞ、訪ひ來る人にも興じさせける。（横井也有―鶉衣）

阿房　秦の始皇帝の時、今の支那陝西省西安府の西北に建てしといふ阿房宮。

横井也有　俳人。名は時般。尾張侯の重臣。明治三年歿す。（一三六二年―一四四三年）

二一　儒教の本質

先づ儒教とは何ぞやといへば、それは今日の言葉でいへば王道といふことにあたる。それであるから、儒教は宗教にあらず、また哲學にもあらず、天下國家を治むる天下經綸の道である。故に政治、經濟、その他社會百般のことにかかはる。

世の中は種種なる方面から成立してゐる。これを統制するのが儒教の目的である、然しながら、治國平天下を實際行ふには自ら道がある。その道は五倫の道といふのである。五倫の道を己の身に修め、人に教へてこれを誘導するのが儒教である。それでは五倫とは何ぞといへば、孟子にそれぞれ德目を擧げてゐる。卽ち父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信といふことを列擧してゐる。卽ち父子、君臣、夫婦、長幼、朋友を以て五倫に對する定說とするのであ

る。

然らば五倫の倫とは何ぞやといへば、倫とはある二つのものの組合せをいうたものである。卽ち君と臣、父と子、夫と婦、兄と弟、朋友同士といふやうに、みな二つのものが一組づつとなつてゐるからである。要するに人と人との間の道德である、人と人との間の規定である。これが宗教でない譯である。宗教とは佛とか神とかを我我と結びつけたものである。卽ち無限の絕對と有限の人生とを結びつけたものである。道德は人と人との規定である。思ふに、箇人としては、父子、兄弟、夫婦といふ家庭間の關係があり、朋友卽ち人間相互としては社會に對する關係があり、また國家に對する關係があつて、結局人間として立つ以上、この五つの外に立つことは出來ないのである。故に五倫は簡單ではあるが、あらゆる道德が、皆この中から生まれて來るのである。それだから、人として五倫の道を學ばなければならぬ。故に教育勅語に「克ク忠ニ克ク孝ニ」とあり、又「兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ」とも仰せられてあつて、儒教が五倫の關係を重く見てゐることは、この勅語と一致するのである。しかのみならず、儒教は今を距ること約一千六百年前、卽ち應神天皇の御宇に渡來して、よく本邦の風教を扶翼し、最近に於いては、滿洲帝國に行はれたる政教の指導原理ともなり、東洋思想の上に燦然として光を放つて居ることは、何人も知る所である。

さて尙五倫に就いて感ずることは、人と人との組合せであるから、儒教は箇人主義でない。自ら優劣、大小、高低があつて、一定の秩序、階級を認めてゐる。然るに箇人主義は、各人間の關係を平等であるといふ。また世人の中には、儒教の說く道德を貶して、「片務的道德である。上の人の爲に計るも、下の人の爲に圖らない」といふ人もあるが、決してさうでない。例へば、父子有親とか君臣有義とか、また論語

には「君は臣を使ふに禮を以てし、臣は君に事ふるに忠を以てす」とあつて、事の宜しきを得ることが「義あり」といふのである。それであるから、儒教道德は決して片務的のものでない。また大學には、「人君となつては仁に止まり、人臣となつては敬、人の子としては孝、人の父としては慈、朋友は信」が大切であることを說いてゐる。これによつて考へてみても、その片務的でないことは明かである。ただそれ人を敎へ導く點より言へば、相手の大部分は人の臣たる者、人の子たる者なれば、忠孝を力說するわけである。要するに五倫の道は、世の中は相持ちといふわけで、決して箇人主義ではない。

さて五倫の德目である親、義、別、序、信といふ言葉の中の親、序、信は、解釋するまでもなく、容易に理解できると思ふ。君臣有義といふことは、前に述べた如く、君は臣を使ふに禮を以てし、臣は君に事ふるに忠を以てすといふことであるが、我が國の忠君、忠義といふことと

顏眞卿　唐の忠臣。安祿山の反するや、眞卿勤王の軍士を募りこれを討つ。後李希烈の反に害せらる。（西曆七〇九年—七八四年）

文天祥　南宋の忠臣。宋末國家衰亡の危機に當り、丞相となり、一意恢復に力めしが、時遂に利なく、元軍に捕へられて殺さる。（西曆一二三六年—一二八二年）

とは多少の相違がある。我が國に於いて忠といふことは、萬世一系の天皇に對し奉り無限の尊敬を捧ぐることである。支那は易世革命の國であるから自らこれと異なる。然し漢字の忠といふのは、我が邦のまごころであるから、論語の忠も、或點に於いて我が國の忠君、忠義と一致するところがあるわけである。又孔子の著された春秋には、大義名分を明かにしてゐる。されば君君たらずと雖も臣臣たらざるべからずといふわけで、漢、唐、宋、明の如き、永く國運の續いた時代には、靖獻遺言に記載されてゐる顏眞卿或は文天祥といふ如き、我が國の忠臣に比すべき人が現れてゐる。

又この春秋といふ書物の影響は日本にも及んだもので、かの大日本史の如きはその一である。この大日本史は國體の尊嚴を示し、君臣の大義を明かにしたもので、王政維新の原動力となつたものである。故に日本の國體を强固にしたことには、孔子の春秋に負ふ

ところが少くないといはれるわけである。

更に夫婦有別の別とは何ぞや。抑、世の中に男女の兩性あるは天の配劑で、生理的、精神的にも相反して、一見すれば相容れざる如きも、その實は別あればこそ相和し相容るることを得るわけである。夫は外に出でて家國の事に奔走し、婦は內に居りて家計及び子女教育の事をつかさどるは、社會永續の大原則である。日本道德は家族主義が段段延長して國家主義となり、從つて忠孝一致、忠孝一本といふことで、儒教所說の五倫の道が正しく實現せられたものであるといつてよろしい。若しこれが破れれば、如何に兵が強くとも、國が富むとも、國家といふものは滅びる外はないのである。西洋に於ける平等主義、箇人主義等といふものは、全然我が國狀に反するもので、斷じて相容れないものである。（小柳司氣太—日本之儒教）

小柳司氣太
漢學者。文學博士。國學院大學教授。新潟縣の人。東京帝國大學文科選科の出身。明治三年十一月生まる。

二二　學生への忠言

自分はすべての人に勸めるに、その生活の中心をこしらへることを以てしたい。その中心を中心として、日日の生活を調整することを以てしたい。若しその中心を發見することが容易でないならば、自分は生活の中心を求めることを以て、それまでの生活の中心とすることを勸めたいと思ふ。

諸君が學校にゐる間は、學校の課程が外部的ながら諸君の生活に一種の中心を與へてゐる。諸君は諸君の生活を調整すべき具體的秩序を手近に持つてゐる。隨つて、たとひ學校をつまらないもの下らないものと見る人人と雖も、尙これによつて、自分の生活に一種の具體的內容を與へられてゐることは爭ふことが出來ないであらう。しかし諸君が學校を卒業して、授業時間や、課題や、練習や、試

驗の束縛を脱れる時、諸君はまた一方に、何となく日日の生活に具體的内容を缺いて、退屈と空虚とを覺えることを禁じ得ないであらう。學校に代つて諸君の生活の中心となるものが、すぐには諸君の手に落ちて來ないであらう。

多くの人は學校を卒業すると共に、何かをしなければならぬ義務を他人から負はされるか、若しくは自らの感情のうちにこれを負ふのを常とする。しかし今日の社會は、我等の卒業を待ち受けてゐて、直ちに我等に適當な活動の地を與へるやうな社會ではない。さうして、自ら活動の地を造り出さうとするにも、我等は自己の内面に確かさの自信を缺き、我等の働きかけるべき社會に對する適當の知識を缺いてゐるが故に、内外兩樣の意味に於いて、どこから手をつけていいかがわからなくなる。かくて焦躁と、空虚と、この二つの相反せるが如くにして相近似した感情は、手を携へて我等の生活に迫つて來る。さうして我等はあせればあせる程、益〻生活の中心を失つた感じに捉はれなければならない。

凡そ人生は短く、人生は長い。爲すべきことを持つてゐる者には、六七十年の歳月は須臾にして流れ去るであらう。しかし何事にも倦んだ心に取つては、五十年の壽命も、長い退屈な旅と思はれるに違ないのである。さうしてこの短い生涯を空過しない爲にも、この長い一生を退屈せずに暮らす爲にも、我等には生活の中心が必要である。自分は中心を缺いた生活のうちにある充實と幸福とを考へることは出來ない。固よりこの中心は強ひて拵へられたものではなくて、自分の中から發見したものでなければならないが、これを發見することはなかなか容易なことではない。

そこで我等の問題は、更に一歩を進めて、いかにして生活の中心を發見すべきかといふことに移る。この問題に對する解答もまた

固より容易ではないが、自分には、その具體的方法として一つの考案がある。といつても、それは何も珍しいことではない。最も自分に適しさうな人を選んで、その人の內面的發展を精細に迹付け、その通つた路を自分も內面的に通つて見ることである。約言すれば、自らその「師」を擇んで、自己の鍛錬をその師に託することである。師の奴隷とならずに、しかも、師に信賴して、常に師に照らして、自己を發見する途を進めることである。我等の時代はあまりに師弟の關係の薄い時代である。我等の間には十分の責任を帶びて他人の靈魂の教育を引き受ける心持も、尊信と親愛とを傾けて、自己の靈魂の訓練を長上に託する心持も、これ等の崇高な、深入りした心と心

白隱書畫

飯山　長野縣下水內郡。

白隱和尚　高僧。名は慧鶴。俗姓長澤氏。駿河國原驛の人。明和五年寂す。敕して神機獨妙禪師と諡す。（二三四五年—二四二八年）

慧端　臨濟宗の高僧。飯山侯松平遠江守の子。正受老人と號す。享保六年寂す。（二三〇二年—二三八一年）

との交渉があまりに少い。

自分は自分たちの受けて來た纏りのない教育と、徒らに漠然とした廣い知識とを思ふ毎に、古人の受けた鍛錬と訓育とを羨ましいと思ふ。自分はこの春、信濃の飯山に行つて、白隱和尚修行の地なる正受庵を訪うた。庵は高社（たかやしろ）の山を望み、千曲川を望む小丘の上にあつて、杉の老樹の生ひ繁つた幽邃な境にある。初め白隱が慧端和尚をこの庵に訪うた時、慧端は白隱を崖から蹴落したさうだ。白隱はそれにも懲りずに、慧端に師事したさうだ。さうして或日白隱が一つの悟を得て、その坐禪の座から歸つてくる時に、慧端は緣の端に出て遠くから手招をしながら、白隱を歡迎したさうだ。

自分はその話を聞いて、白隱と慧端との間が羨ましくてならなかつた。自分にも自分を崖から蹴落してくれる師匠、緣側から自分を手招してくれる師匠がゐたら、どんなに幸福なことであらう。師

弟とは、與へられるだけ與へ、受けられるだけ受けんとする、二箇の獨立せる、しかも相互に深く信頼せる靈魂の關係である。弟子をその箇性のままに一人の「人」とするところに、師の師たる所以があり、その稟性に隨つて一箇の獨立せる人格となるところに、弟子の最も多くその師に負ふ所以がある。「道」の傳統は、何等かの意味に於ける師弟の關係を經て、始めて內面的に生きるのである。

拈華微笑圖（谷口香嶠筆）

固より師に就くことは、自分の生活內容を、その師の供給に仰ぐといふことではない。我等が愛し、憎み、努め、怒る心は、我等が我等自身のうちに豫め持つてゐなければならぬところである。これ等の愛憎や、喜悲は、我等の生活を刻刻に新たな境涯に漂はしめ、往往にして我等の生涯を困惑と、壅塞と、彷徨と、昏迷との境に導く。この窮境を拓き、この關門を透過する努力に於いて、我等は始めて「師」の忠言を必要とするに至るのである。我等が師に就いて學ぶべきところは、問題の解き方である。途の切り拓き方である。生活內容を流れ行かしむべき方向である。若し我等自身のうちに、豫め生活內容を有することなく、一定の傾向を有することなく、解決を要する問題を有することがないならば、師に就くことは全然無意味でなければならない。

故に生活の中心を求める爲に、古人の著作を研究するといふ時、我等の生活の意味は讀書にあるのではなくて、我等の內面的知覺を開拓して、これを正しい方向に導いて行く所にあることは、繰り

返すまでもないことである。書を讀むことは、自ら生きることを停止することを意味するならば、また他人の著作を研究することは、自ら省みることを中斷することを意味するならば、我等は固よりいかなる場合にも、書を讀むことを、他人の思想を研究することを、生活の中心とすべきではない。此處に讀書といひ、研究といひ、師に就くといふのは、自ら生き、自ら省みる爲の一つの途を意味するものであることは、明瞭に記憶して置く必要がある。師に就いて學ぶことを要する第一義諦は、行住坐臥に師の言葉を讀誦することではなくて、何よりもまづ、師と同一の勇氣を以て、人生に衝き當ることでなければならない。自己の直接經驗を基礎として人生の疑に觸れ、人生の疑を解く途を求めることでなければならない。

（阿部次郎―三太郎の日記）

阿部次郎　哲學者。山形縣の人。東北帝國大學教授。東京帝國大學哲學科出身。明治十六年生まる。

二三　我等の使命

我が國は、今や國運頗る盛んに、海外發展のいきほひ著しく、前途彌ゝ多望な時に際會してゐる。產業は隆盛に、國防は威力を加へ、生活は豐富となり、文化の發展は諸方面に著しいものがある。夙に支那・印度に由來する東洋文化は、我が國に輸入せられて、惟神の國體に醇化せられ、更に明治・大正以來、歐米近代文化の輸入によつて、諸種の文物は顯著な發達を遂げた。文物・制度の整備せる、學術の一大進歩をなせる、思想・文化の多彩を極むる、萬葉歌人をして今日にあらしめば、再び「御民吾生ける驗あり天地の榮ゆる時にあへらく念へば」と謳ふであらう。明治維新の鴻業により舊來の陋習を破り、封建的束縛を去つて、國民はよくその志を遂げ、その分を竭くし、爾來七十年、以て今日の盛事を見るに至つた。

御民吾云云　「萬葉集」卷六に見える海犬養宿禰岡麿の歌。

併しながらこの盛事は、靜かにこれを省みるに、實に安穩平靜のそれに非ずして、內に外に波瀾萬丈、發展の前途に幾多の困難を藏し、隆盛の內面に混亂をつつんでゐる。卽ち國體の本義は、動もすれば透徹せず、學問・敎育・政治・經濟その他國民生活の各方面に幾多の缺陷を存し、伸びんとする力と混亂の因とは錯綜表裏し、燦然たる文化は內に薫蕕を併せつつみ、ここに種種の困難な問題を生じてゐる。今や我が國は、一大躍進をなさんとするに際して、生彩と陰影相共に現れた感がある。併しながら、これ飽くまで發展の機であり、進步の時である。我等はよく現下內外の眞相を把握し、據つて進むべき道を明らかにすると共に、奮起して難局の打開に任じ、彌〻國運の伸展に貢獻するところがなければならぬ。

現今我が國の思想上・社會上の諸弊は、明治以降餘りにも急激に多種多樣な歐米の文物・制度・學術を輸入したために、動もすれば、本

を忘れて末に趨り、嚴正な批判を缺き、徹底した醇化をなし得なかつた結果である。抑〻我が國に輸入せられた西洋思想は、主として十八世紀以來の啓蒙思想であり、或はその延長としての思想である。これらの思想の根柢をなす世界觀・人生觀は、歷史的考察を缺いた合理主義であり、實證主義であり、一面に於て個人に至高の價値を認め、個人の自由と平等とを主張すると共に、他面に於て國家や民族を超越した抽象的な世界性を尊重するものである。從つて、そこには歷史的全體より孤立して、抽象化せられた個個獨立の人間とその集合とが重視せられる。かかる世界觀・人生觀を基とする政治學說・社會學說・道德學說・敎育學說等が、一方に於て我が國の諸種の改革に貢獻すると共に、他方に於て深く廣くその影響を我が國本來の思想・文化に與へた。

我が國の啓蒙運動に於ては、先づ佛蘭西啓蒙期の政治哲學たる

自由民權思想を始め、英米の議會政治思想や實利主義・功利主義、獨逸の國權思想等が輸入せられ、固陋な慣習や制度の改廢にその力を發揮した。かかる運動は、文明開化の名の下に廣く時代の風潮をなし、政治・經濟・思想・風習等を動かし、所謂歐化主義時代を現出した。然るに、これに對して傳統復歸の運動が起つた。それは國粹保存の名によつて行はれたもので、澎湃たる西洋文化の輸入の潮流に抗した國民的自覺の現れであつた。蓋し極端な歐化は我が國の傳統を傷つけ、歴史の内面を流れる國民的精神を萎靡せしめる惧れがあつたからである。かくて歐化主義と國粹保存主義との對立を來し、思想は昏迷に陷り、國民は、内、傳統に從ふべきか、外、新思想に就くべきかに惱んだ。

然るに、明治二十三年「教育ニ關スル勅語」の渙發せられるに至つて、國民は皇祖皇宗の肇國樹德の聖業とその履踐すべき大道とを

覺り、ここに進むべき確たる方向を見出した。然るに、歐米文化輸入のいきほひの依然として盛んなために、この國體に基づく大道の明示せられたにも拘らず、未だ消化せられない西洋思想は、その後も依然として流行を極めた。即ち西洋個人本位の思想は、更に新しい旗幟の下に實證主義及び自然主義として入り來り、それと前後して理想主義的思想學說も迎へられ、又續いて民主主義・社會主義・無政府主義・共產主義等の侵入となり、最近に至つてはファッシズム等の輸入を見、遂に今日我等の當面する如き思想上・社會上の混亂を惹起し、國體に關する根本的自覺を喚起するに至つた。

抑〻社會主義・無政府主義・共產主義等の詭激なる思想は、究極に於てはすべて西洋近代思想の根柢をなす個人主義に基づくものであつて、その發現の種種相たるに過ぎない。個人主義を本とする歐米に於ても、共產主義に對しては、さすがにこれを容れ得ずして、今

やその本來の個人主義を棄てんとして、全體主義・國民主義の勃興を見、ファッショ・ナチスの擡頭ともなつた。即ち個人主義の行詰りは、歐米に於ても、我が國に於ても、等しく思想上・社會上の混亂と轉換との時期を將來してゐるといふことが出來る。

久しく個人主義の下にその社會・國家を發達せしめた歐米が、今日の行詰りを如何に打開するかの問題は暫く措き、我が國に關する限り、眞に我が國獨自の立場に還り、萬古不易の國體を闡明し、一切の追隨を排して、よく本來の姿を現前せしめ、而も固陋を棄てて益〻歐米文化の攝取醇化に努め、本を立てて末を生かし、聰明にして宏量なる新日本を建設すべきである。即ち今日我が國民の思想の相剋、生活の動搖、文化の混亂は、我等國民がよく西洋思想の本質を徹見すると共に、眞に我が國體の本義を體得することによつてのみ解決せられる。而してこのことは獨り我が國のためのみならず、今や個人主義の行詰りに於てその打開に苦しむ世界人類のためでなければならぬ。ここに我等の重大なる世界史的使命がある。

（文部省編纂「國體の本義」による）

新編中等國語讀本（新制版）卷十終

戰鬪敗之

近世文學一覽

紀元：二二五〇　二三〇〇　二三五〇　二四〇〇

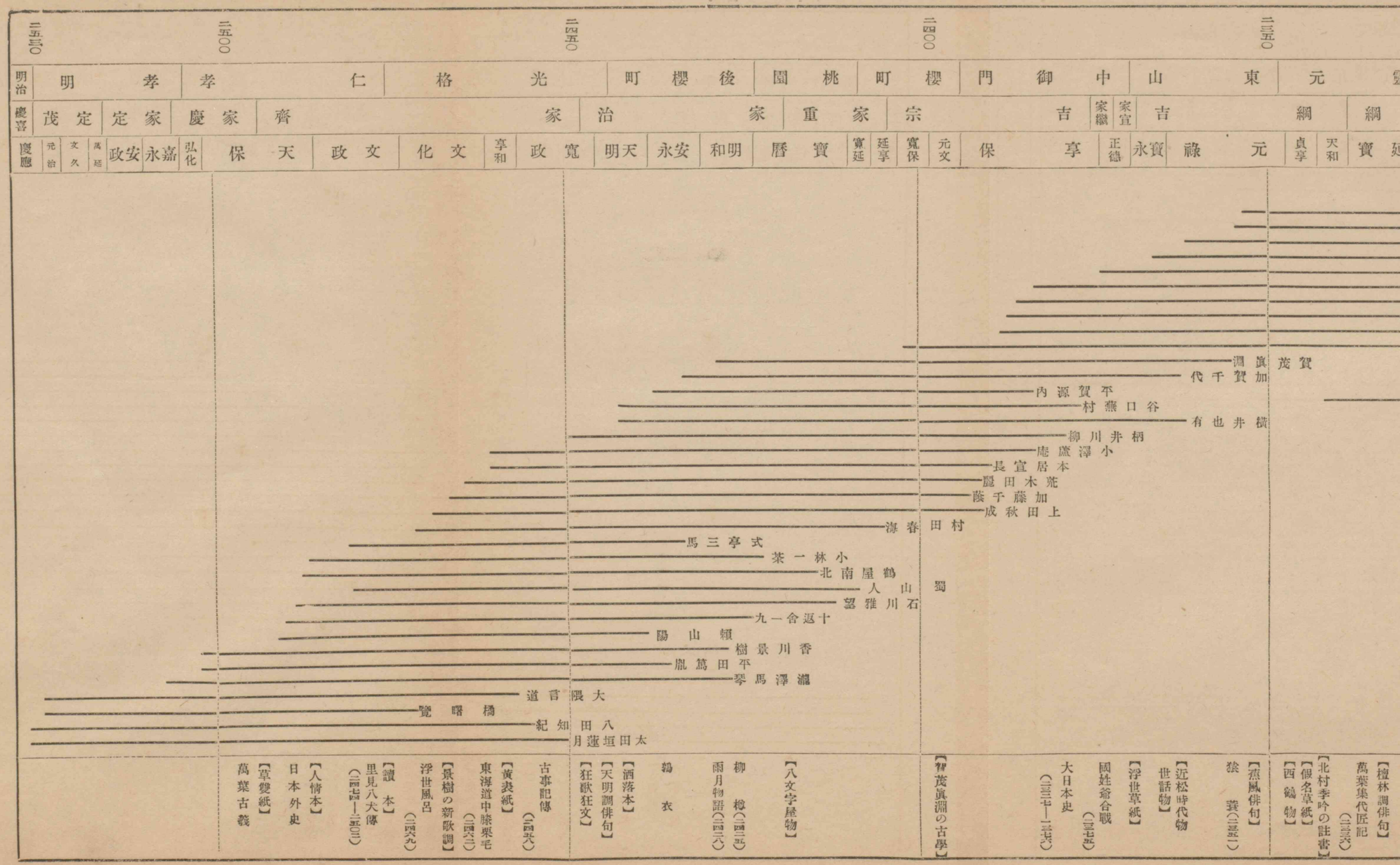
天皇：後陽成　後水尾　明正　後光明　後西　靈元　東山　中御門　櫻町　桃園

武家：家康　秀忠　家光　家綱　綱吉　家宣　家繼　吉宗　家重

年號：文祿　慶長　元和　寛永　正保　慶安　承應　明曆　萬治　寛文　延寶　天和　貞享　元祿　寶永　正德　享保　元文　寛保　延享　寛延　寶曆

作者：
細川幽齋
中江藤樹
井原西鶴
藤原惺窩
松尾芭蕉
契沖
榎本其角
貝原益軒
近松門左衛門
新井白石
竹田出雲
荻生徂徠
北村季吟
賀茂眞淵
加賀千代
松永貞德
西山宗因
平賀源內
谷口蕪村
横井也有
柄井川柳
小澤蘆庵
本居宣長
荒木田麗
加藤千蔭
上田秋成
村田春海
小林一茶
鶴屋南北
蜀山人
石川雅望
十返舍一九
香川景樹
瀧澤馬琴

作品：
二二六三 家康征夷大將軍に任ぜらる
【儒學振興】
【古書出版】
俳諧御傘（二三〇六）
【檀林調俳句】
萬葉集代匠記（二三三六）
【北村季吟の註書】
【假名草紙】
【西鶴物】
【蕉風俳句】
猿蓑（二三五一）
【近松時代物世話物】
【浮世草紙】
國姓爺合戰（二三七五）
大日本史（二三一七—二五六六）
【賀茂眞淵の古學】
【八文字屋物】


三五〇
三五〇〇
三四五〇
三四〇〇
三三五〇
明治
孝明
孝仁
光格
後櫻町
桃園
櫻町
御門中
山東
元靈
慶喜
茂定
定家
慶家
齊家
治家
重家
宗吉
家繼
家宣
吉綱
綱寶
慶應
元治
文久
萬延
政安
永嘉
弘化
保天
政文
化文
享和
政寛
明天
安永
和明
暦寶
寶延
延享
寛保
元文
保享
正德
永寶
祿元
貞享
天和
寶延
茂賀
渊眞
代千賀加
内源賀平
村燕口谷
有也井横
柳川井柄
虚蘆澤小
長宣居本
麗田木荒
蔭千藤加
成秋田上
海春
田村
馬三亭式
茶一林小
北南屋鶴
人山
望雅川石
九一舍返十
陽山頼
樹景川香
胤篤田平
琴馬澤瀧
道言隈大
覽曙橋
紀知田八
月蓮垣田太
蜀
【檀林調俳句】
萬葉集代匠記（三三六）
【北村季吟の註書】
【假名草紙】
【西鶴物】
【蕉風俳句】
猿蓑（三三五一）
【近松時代物世話物】
【浮世草紙】
國姓爺合戰（三三七五）
大日本史（三三七一—一三七六）
【賀茂眞淵の古學】
【八文字屋物】
柳樽（一四三五）
雨月物語（一四三六）
鶏衣
【酒落本】
【天明調俳句】
【狂歌狂文】
古事記傳（一四五八）
【黄表紙】
東海道中膝栗毛（一四六二）
【景樹の新歌調】
浮世風呂（一四六九）
【讀本】
里見八犬傳（一四七四—一五〇二）
【人情本】
日本外史
【草雙紙】
萬葉古義

和		折口信夫 武田祐吉 島津久基 久松潛一 金田一京助 志田義秀 本間久雄 齋藤清衛
10		
	坪内逍遙	
		有島武郎 長與善郎 志賀直哉 里見弴 谷崎潤一郎 久米正雄 小川未明 菊池寛 芥川龍之介 豐島與志雄 中里介山 川端康成 横光利一
	三宅雪嶺	
		釋迦空 土屋文明 松村英一
		白鳥省吾 野口米次郎 佐藤惣之助 堀口大學

現代文學一覽

紀元	年號	作者	作品
二五三〇	安政		
	萬延		
	文久		
	元治		
	慶應		
二五三〇	明治 元	大槻文彥	
		橘曙覽	
		田口卯吉	
		坪内逍遙	
二五四〇	明治 一〇	坪内逍遙	
		岡正子規	
		高山樗牛	
		尾崎紅葉	
		夏目漱石	
二五五〇	明治 二〇	藤岡作太郎	
		二葉亭四迷	
		石川啄木	
		有島武郎	
		蘇峯德富	
		露田伴幸	
		櫻地福	
		賀芳矢一	
		蘆花德富	
		村島抱月	
		佐佐醒雪	
		佐佐木信綱	
		岡本綺堂	
		河東碧梧桐	
		與謝野寛	
		高濱虛子	
		尾上柴舟	
		花袋	
		山田	
		藤村	
		島崎	
		藤嶋雪内	
		中村吉蔵	
		小山内薫	
		北原白秋	
		谷崎潤一郎	
		山本有三	
		菊池寛	
		芥川龍之介	
二五六〇	明治 三〇		
			【印刷術の進歩】
			【新聞・雜誌】
			【學制頒布】
			【歐化主義】
二五七〇	明治 四〇		
			【政治小說】
			經國美談
			【新體詩の創始】
			新體詩抄
			【小說の革新】
			小說神髓
			浮雲・五重塔
			多情多恨
			【俳句の革新】
			獺祭書屋俳話
			【和歌の革新】
			萩の家歌集
			【戲曲の革新】
			史劇論
			桐一葉
			【新體詩の隆興】
			若菜集
			天地有情
			【和歌評釋の創始】
			【評論の勃興】
			樗牛全集
			【自然主義】
			蒲團、破戒
			【餘裕派の小說】
			漱石全集
二五八〇	大正 元		
			【新浪漫主義】
			【和歌の新調】
			啄木歌集
			【新理想主義】
			【新現實主義】
			【社會問題】
			【大衆文藝】
			【飜譯文學】
			【新詩、童謠】
			森鷗外
二五八六	昭和 二		
			擬
	昭和 一〇		

研究	評論	小說	戲曲	和歌	俳句	詩	飜譯及散文

	正	昭和	
	一五	二	一〇
研究			
評論			
小說	森	鷗外	坪内逍遙 三宅雪嶺
戲曲			
和歌			
俳句		内藤鳴雪	
詩			
飜譯及散文			

【新現實主義】【社會問題】【大衆文藝】【飜譯文學】【新詩、童謠】

研究

榊原芳野　近藤芳樹　小中村清矩　黑川眞頼　物集高見　本村正辭　鈴木弘恭　大槻文彦　中村秋香　坪内逍遙　上田萬年　芳賀矢一　井上通泰　藤岡作太郎　佐佐醒雪　金子元臣　藤井乙男　佐佐木信綱　沼波瓊音　藤村作　松井簡治　五十嵐力　水谷不倒　伊原青々園　新村出　柳田國男　吉澤義則　山田孝雄　高野辰之　橋本進吉　折口信夫　武田祐吉　島津久基　久松潛一　金田一京助　志田義秀　本間久雄　齋藤清衛

評論

福澤諭吉　坪内逍遙　森鷗外　高山樗牛　島村抱月　綱島梁川　坪内逍遙　高安月郊　黑田清綱　河東碧梧桐　武島羽衣　二葉亭四迷　德富蘆花　上田敏　昇曙夢　小山内薰　土井晚翠　薄田泣菫　厨川白村　生田長江　蒲原有明　河井酔茗　馬場孤蝶　杉村楚人冠　薄田泣菫　相馬御風　吉村冬彦　楠山正雄　豐島與志雄　佐藤春夫

小說

假名垣魯文　矢野龍溪　末廣鐵腸　柴東海散士　櫻癡　加藤千浪　内藤鳴雪　高濱虛子　高崎正風　黑岩涙香　雨江　二葉亭四迷　德富蘆花　上田敏　昇曙夢　小山内薰　土井晚翠　薄田泣菫　厨川白村　生田長江　蒲原有明　河井酔茗　馬場孤蝶　杉村楚人冠　相馬御風　吉村冬彦　楠山正雄　豐島與志雄　佐藤春夫

戲曲

河竹默阿彌　依田學海　福地櫻癡　坪内逍遙　島村抱月　高安月郊　黑田清綱　河東碧梧桐　武島羽衣　二葉亭四迷　德富蘆花　上田敏　昇曙夢　小山内薰　土井晚翠　薄田泣菫　厨川白村　生田長江　蒲原有明　河井酔茗　馬場孤蝶　杉村楚人冠　相馬御風　吉村冬彦　楠山正雄　豐島與志雄　佐藤春夫

和歌

太田垣蓮月　井上文雄　加藤千浪　間島冬道　高崎正風　黑田清綱　河東碧梧桐　武島羽衣　二葉亭四迷　德富蘆花　上田敏　昇曙夢　小山内薰　土井晚翠　薄田泣菫　厨川白村　生田長江　蒲原有明　河井酔茗　馬場孤蝶　杉村楚人冠　相馬御風　吉村冬彦　楠山正雄　豐島與志雄　佐藤春夫

俳句

角田竹冷　戸川殘花　正岡子規　内藤鳴雪　高濱虛子　鹽井雨江　黑岩涙香　德富蘆花　上田敏　昇曙夢　小山内薰　土井晚翠　薄田泣菫　厨川白村　生田長江　蒲原有明　河井酔茗　馬場孤蝶　杉村楚人冠　相馬御風　吉村冬彦　楠山正雄　豐島與志雄　佐藤春夫

詩

外山、山　坪内逍遙　中西梅花　森田思軒　落合直文　大和田建樹　大和田建樹　森鷗外　黑岩涙香　德富蘆花　上田敏　昇曙夢　小山内薰　土井晚翠　薄田泣菫　厨川白村　生田長江　蒲原有明　河井酔茗　馬場孤蝶　杉村楚人冠　相馬御風　吉村冬彦　楠山正雄　豐島與志雄　佐藤春夫

飜譯及散文

福澤諭吉　坪内逍遙　森鷗外　高山樗牛　島村抱月　綱島梁川　坪内逍遙　高安月郊　黑田清綱　河東碧梧桐　武島羽衣　二葉亭四迷　德富蘆花　上田敏　昇曙夢　小山内薰　土井晚翠　薄田泣菫　厨川白村　生田長江　蒲原有明　河井酔茗　馬場孤蝶　杉村楚人冠　相馬御風　吉村冬彦　楠山正雄　豐島與志雄　佐藤春夫

昭和十二年五月八日印刷
昭和十二年五月十二日發行
昭和十二年十二月二十五日訂正印刷
昭和十二年十二月三十日訂正發行

不許複製

新編中等國語讀本（新制版）

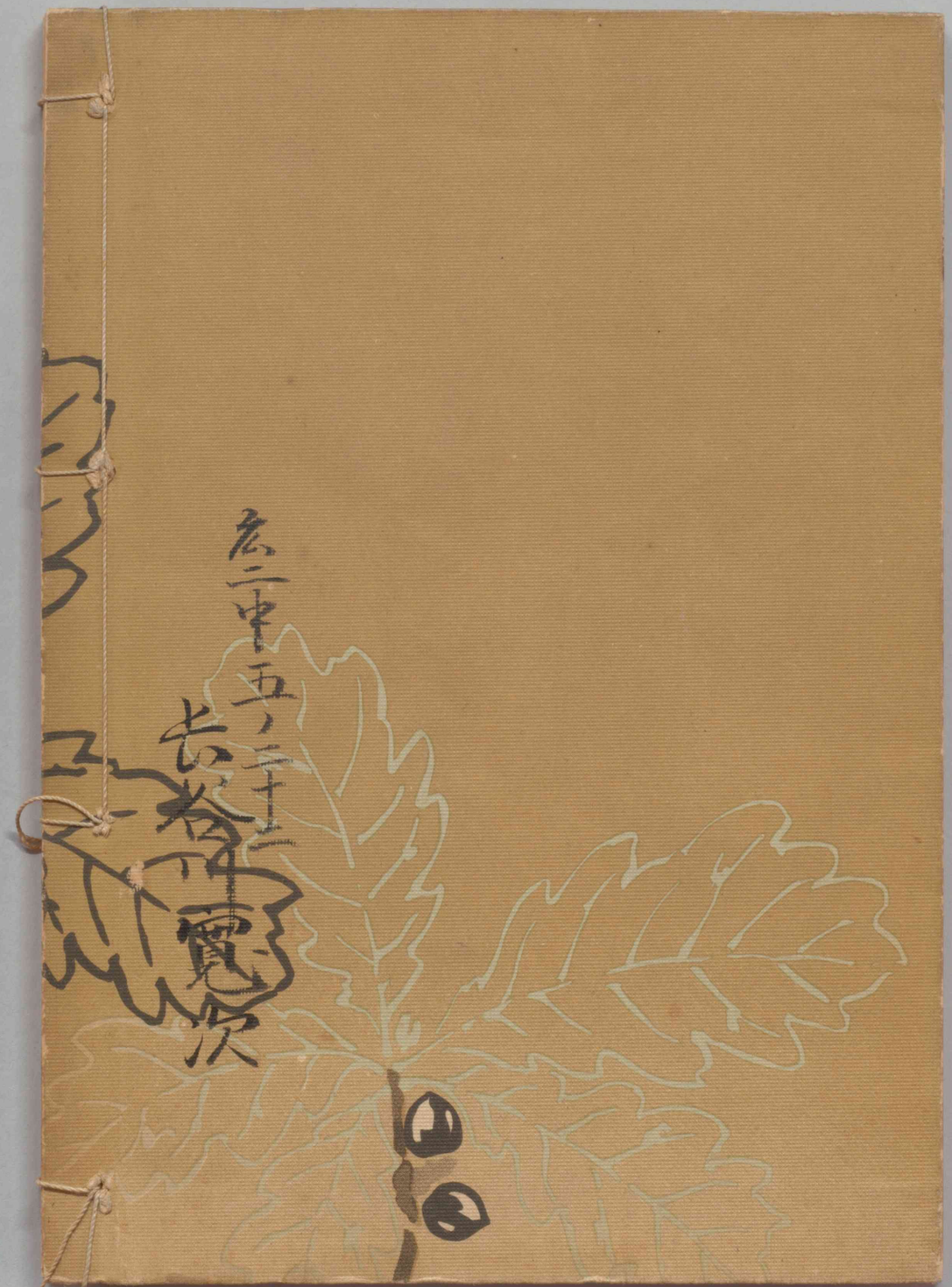
定價	
卷一、二各金六拾五錢	
卷三、四各金六拾六錢	
卷五、六各金六拾壹錢	
卷七、八各金五拾六錢	
卷九、十各金五拾貳錢	

編者　金子元臣

發行者　東京市神田區錦町一丁目十六番地
株式會社明治書院
取締役社長　三樹退三

印刷所　東京市神田區三崎町二丁目一番地
株式會社明章印刷所
印刷者　細谷祐三

發行所　東京市神田區錦町一丁目
振替口座東京四九九一番
株式會社明治書院
電話神田(25)二一四七番(3)


長二中五八二十二
長谷川寛次